

其後ヲ善スル能ハス之ヲ改ムルヤ如何曰ク夫維新以降政府ヲ改正スル常ニ其體面ヲ改メ其中心ヲ改メス故ニ之ヲ改革スル既ニ再四其制稍精其法稍密ニ赴クト雖モ以テ其公利ヲ見サルモノ他ナシ大臣其人ヲ得サルニ在リ是レ徒法以テ自ラ行ハサル能ハサル所以ニシテ如何ナル良法善政ト雖モ書餅ノ如シ宗光今常職アリ宜任ニ任シ宜務ヲ務メハ復タ止ム可シ然而テ論此ニ及フモノ他ナシ不肖ノ身累次榮轉寵遇ノ過分ナル萬死未タ報スルニ足ラサルモノアリ是肯テ默止スルニ忍ヒス尙ヲ一言ヲ進メントス今政府執政ノ大臣タル或ハ各藩ノ門地ニ出ツルアリ或ハ兵馬ノ勳ニ出ルアリ或ハ當時政府ノ變換ニ際シ卒然推舉セラル、アリ而テ自己ノ虛名ヲ慕テ退恬ヲ以テ賢トスルモノアリ官ヲ以テ家産ノ如クシ是非得失ヲ其際ニ容レサルモノアリ伴食自安其位ヲ固クスルアリ是ヲ以テ陽互ニ其議ヲ同シ陰實ニ其說ヲ異ニス古賢相廟堂ニ爭ヒ私交ニ喜フ者ト反對スト云フ可シ故ニ嫌疑ヲ恐レ猜忌ヲ避ケ遂ニ廟堂上相接スルニ情ヲ以テシ難ヲ避ケ

易ニ就キ一人以テ國家ノ安危ヲ自任スル者ナシ況ヤ經濟ニ通シ吏務ヲ辨スルヲ以テ責ルニ足ランヤ如此ニシテ百タヒ政府ノ體裁ヲ變換スルトモ決テ寸功尺益ナカル可シ故ニ宗光閣下ニ望ム處其體面ヲ改ムルニ非スシテ其中心ヲ改ムルニ在リ其制度ヲ撰ムニ非スシテ其人ヲ撰ムニ在リ苟モ其人ヲ得ルヤ制度改革ノ如キ豈ニ難シトスルニ足ラン方今實ニ其人ニ乏シト雖モ宗光所見ヲ以テスルニ猶二三ノ指ヲ屈スルアル可シ閣下若能ク其人ヲ採擧シ之ト列シ之ト合シ先スルニ誠心ヲ以テシ國家ノ安危ヲ自任シ國本ヲ興立シ民力ヲ培養シ以テ時弊ヲ矯正センコトヲ希望ス其詳細ノ如キ今之ヲ筆スル能ハス面晤ニ委サンノミ夫閣下獨任ノ地ニ非ス專決ノ權ヲ有セス而シテ宗光獨リ之ヲ閣下ニ望ム所以ノモノ抑亦說アリ閣下ノ國家ヲ憂フル此ニ年アリ積ヲ以テ王政ノ復古ヲ致シ亦以テ廢藩置縣ノ功ヲ奏シ凡ソ國家ノ公益ヲ起シ國民ノ幸福ヲ立ツル所以ノモノ閣下之ニ關與セサル事ナシ故ニ以テ朝廷ノ閣下ヲ待ツ處人民ノ閣下ニ望ム處固ヨリ他人



ノ比ニ非ス宗光以爲閣下ノ朝廷ニ於ル分則チ君臣ト雖モ情即チ骨肉ノ如シ故ニ此際ニ於テ乎之ヲ他人ニ望マス獨リ閣下ニ望ム所以ニシテ又閣下ノ常例ヲ持セスシテ摧拔自任スルヲ知ルナリ書實ニ言ヲ盡サス宗光歸京亦三旬ノ間ニアリ尙面晤ヲ賜ヒ愚衷ヲ吐露セシメヨ恐懼謹言

明治六年九月第二日夜十二時半閣筆

於泉布觀

陸 奥 宗 光

松菊公閣下

【備考】

木戸孝允在歐中より留守政府の施政に嫌たらず、不平滿々たり、特に重信の處置を喜ばず、この書宗光の留守政府の施政を彈劾したるものにして、暗に重信を痛撃するが如し、これより孝允益重信と惡しく、三條公等に迫りて大藏省を去らしめんとす、この書孝允と重信の關係を見るに於て重要なものなり、

【參考】

木戸孝允書翰「三條實美宛」明治六年九月十四日

謹呈過日言上仕置候愚存云々別帋草稿相認申候間則御左右へ差出し且又當今之景況試に申上候へは大久保大藏卿始等も至急態々萬里外より御用召被爲在然るに既に已に御改正事も被爲在是又不被爲得止御儀歟と奉存候乍去大藏には惣裁を被爲置至急被爲召候大藏卿も其位地に在り候否は朝廷上之御模様同氏も如何之所存に候哉於孝允も此邊之御體裁如何哉と奉存候定而逐々御所致も被爲在候御事と奉存候に付別に言上不仕候孝允之儀は先年來申上置猶此度も逐々言上仕候通免職之處偏に奉歎願候短才微力不堪其任上於朝廷も冗員を被爲省候は今日之御一急務に付平生之宿志被聞召届候へは公私得其宜候儀に御坐候間幾應にも御許可奉萬禱候恐々頓首九拜

九月十四日夜

再白過日應御下問臺灣朝鮮云々巨細言上候邊何卒當今天下之景況偏く御一視被爲遊爲國民御輕動無之様奉萬願候敬白



孝 允

三條公閣下

内呈

【備考】孝允是年歸朝以來重信を喜ばず、この書も大久保に託して、重信の大藏省總裁の任にあるを難じ、大藏卿既に歸朝せしに、總裁をその儘になし置くは政府の體裁を爲さずといふにあり、次の實美書翰はその返翰にして、重信の總裁職は留守政府の止むを得ざるの事情に出で、大久保歸朝したるも大藏卿に未だ復任勤仕せざるを以て總裁を故の儘に置くことを述べ、孝允の諒解を求めたるなり、

【參考】

三條實美書翰「木戸孝允宛」明治六年九月十五日

今朝來書熟讀仕候足下見込一冊被相廻慥落掌尙遂熟覽其上可及答候  
扱大久保之事モ云々紙面之趣尤之事ニ候然處右ハ同人歸朝前大藏省  
殆瓦解之姿ニ立至リ實以不得止情態ヨリ總裁ヲモ被命候事ニハ大久  
保歸朝之上ハ體裁モ相立候様所分可有之義ニ候得共同氏義モ彼是情  
實有之未勤仕モ不致成行右等之事情ハ不得止次第ハ偏諒察有之度ト

存候尙亦足下進止之義モ追々承候義ニハ有之候得共實以 皇國之浮  
沈王政一新之成否ハ今日ニ可有之トモ存候得ハ如足下柱石之重臣退  
遁辞表相成候テハ何ヲ以國家ヲ保護シ國脉ヲ維持可致哉尤其責ハ拙  
者輩ニ有之候得ハ敢而足下ニ可責義ニハ無之候得共痛嘆之極ニ御座  
候偏爲國家憤發盡力爲 朝廷億兆奉職勉勵有之度企望仕候事ニ御座  
候書不盡意萬々期面上候先以回答旁如此候也

九月十五日

再白臺灣朝鮮之義ハ大使モ歸朝相成候上ハ猶遂評議候事ニ付高諭  
之通熟思可仕候扱朝鮮使節之義先頃足下へモ申入候處西郷參議ヲ  
使節ニ可遣トノ事ハ足下ニモ承知無之哉ニ傳聞仕候間左候ハ、全  
拙者ヨリ申入候處疎漏ニハ徹底不致事ト存候間尙爲念申入候抑朝  
鮮使節之義ハ緩急順序ハ可有之候得共到底使節不差遣候ハハ不相  
濟事ト見込候得ハ使節被遣候義ハ不俟論事ニ可有之就ハ西郷參



議段々懇願モ有之候間同人に被仰付候モ可然尤使節差遣サレ候ハ、其手順モ得失可有之事ニ付豫メ大使歸朝前ニモ見込候處ハ取調置大使歸朝之上篤ト遂評議彌御決議相成候ハ、可然トノ評論ニ西郷參議ニモ其之次第ハ申聞候事ニ候間此段爲念申入候尤内決トハ申候モ兎角大使歸朝ヲ俟可及評議ニ筈ニ候間此上可否得失ハ飽迄討論有之事ニ候乍序右申入候早々不備  
三白先日入内覽候書岩倉大使へ見セ申度候間返却有之度候

實 美

參議 木戸 殿

内展

【參考】

木戸孝允書翰「伊藤博文宛」明治六年九月二十日

亂筆御推讀可被下候餘り不正不公平之事而已承知候モは不顧自病  
兎角憤慨之餘失中ニ事不少此書中も不及言も有之申候御垂恕可被

下候

爾後彌御清安と大賀此事に御座候過日鳥渡御尋申候處折柄御留守中  
に甚殘念に奉存候兩三日前より被惱奇病座作も不自由甚困却いた  
し居申候故重御尋も不得仕候于時京都裁判處京都府との訴訟種々  
取もつれ候故先達を臨時裁判處被差立候に付双方いづれが公正に歸  
着候哉之邊御吟味有之候事と相考候處全臨時裁判處京都府裁判處へ  
荷擔偏頗之處致に涉り只管威權を以暴に壓倒いたさんと而已相企正  
院もまた裁判處へ偏頗あるに似たり依り過日其邊之事大隈參議へも  
及一論置候得共更に其後公け之處致も無之大隈も實に近來如何之考  
按哉と甚不審に相考へ申候現に先達は鍋島人之明らかに罪科有之  
候ものを同氏之周旋と歎に而却り拔擢に預り候様之事も有之世間皆  
不服如此次第には裁判處之如きものは御廢しに相成候方爲天下爲  
人民にも相成可申舊幕之暴政に而も如此暴威を以身分ある官員を取



扱候事は無之と奉存候昨今格別御繁多とは奉存候へ共大隈へ一御忠告被下度弟も臥床中ニある家内之自用も得運不申候に付無據此段老兄へ御内々御頼申候先は爲其草々頓首

九月廿日

木戸

伊藤老兄

御内披

三四九 五代友厚書翰「大隈重信宛」明治六年九月三日

拜啓

出立之砌も遠所迄御出掛被下恐縮ニ不堪奉至謝候夫も海上平靜廿六日未明神戸着船無異御放念を希ふ(利通)大久保ニも無異明日も宇治及石山邊に遊行之筈歸坂之上亦々高野山及紀州和歌浦邊内遊之筈就るも來ル十一日ニ

も歸京無覺束尤兼る形勢を推考仕候處六ヶ敷東京も可成京攝之間ニ遁を居候様の心得ニ相見候大使歸朝迄も此方へ相遊ひ居候模様ニ御座候間大使歸朝相成候ハ、傳信を以御呼歸相成候様御注目被下度可成相促早目ニ登京可仕候得共御合迄申上置候勿論拙生ニも宇治石山邊ニも不參候昨日北畠(治房)下坂仕候付御沙汰之趣も相傳置申候益々牧村(横村正直)との云々六ヶ敷相成兎角政府の御指令相下候外無之候政府の御母堂様より牧村に内命を下し大使發行後御變革相成候條々取調方を始候趣云々不遠御直ニ可申上候假令十一日の便も登京不仕候も十八日の便ニも歸京仕候得も其内奉得尊意候恐々頓首

九月三日

松陰生

重信様



三五〇 玉乃世履書翰「大隈重信宛」 明治六年九月五日

又出省懸け相認拜呈仕候間亂筆之上脱誤等御海涵奉願上候

以書中奉申上候然者外務省於る英國訴訟之義ニ付愚考申上度奉存昨夜登館仕候處御外出中ニ不得拜謁残念ニ奉存候今朝ハ早朝外務省へ罷在候而午後五時迄ハ審問ニ相成候約定明六日も休暇を廢し午前九時より午後五時迄之約定ニ英人立合審問仕候間今晚登館之處も明日之取えらへ下地ニ登館不得仕候歟も難計奉存候仍之書中ニ荒増御聞取被遊被下候様奉懇願候左ニ

- 一 英人の方ニハ每件ニ代言人を一人ツ、相頼み候而内實ハ裁判官之ハ「ウナン」と打合候事ニ被察申候
- 一 日本人ハ少し之間合も無之様に疊み懸く猶豫之出來ぬやうニ仕向候事と被察候
- 一 然處日本之方ニハ政府之代人北村(泰)權少判事一人ニ極入込候大苦難之

七件を引受候事故應接無暇之景況ニ有之候

一 加之ニ大藏省中ニハ場所を借スノミとの事ニ萬事關係せぬやう々々と致し候事故北村ハ大困却殆ト血迷ひ候光景ニ有之候

一 右之如く相成候を英人ニハ事情を察し愈以事々切迫々々と疊懸ケ候勢ニ有之候

一 外務省中之官員ニハ所詮公事之勝敗之事よりハ交際上ニ不都合なき様ニ平生之仕方ニ付可成丈ケ英人之望ニ應し度光景あり是ハ無理からぬ事と存候

現今之光景如此ニ御座候也

右ニ付而小生至らぬ愚見如左ニ御座候

一 英人ニハ十分ニ手を揃へ候事故日本人ニハも十分ニ手を揃へ候而も

英國之勢 強

日本之勢 弱



英裁判役

ハウナン

練熟

日本裁判役

玉乃世履

不練熟

右之勢ニ而双方十分手を揃へ候而さへも日本之方如何ニも危ク相見可申候

斯ル處へ

彼ハ十分ニ手ヲ揃へ候

我ハ五分も手ハ揃ハス候

前文ニ申上候通り

北村一人大藏省中ニ而大狼狽

玉乃ハ外務省ニ而イレ廻リ申候

右之形勢ニ而ハ我國之可勝公事も敗ニ相成リ可申ハ必然ニ可有之況乎牛

角相對之公事ハ彼之方ニ勝を取られ可申哉残念之至奉存候

何故かれハ如何程「ヒール」ニ頼み候而も事實を申合候日本名代人壹人

ニ而ハ届キ候事ハ相成リ不申況ヤ大藏省ニ而北村を外ニスルニ於テ

ヲヤ

右之處篤と御洞察被遊被下候而北村之外ニ小野ニ而も岩橋(敬稱)ニ而も可然御

人撰之上至急ニ名代人御申付被遊被下候得ハ御國之御爲大慶と奉存候此

上ニ而ハ負公事ニ相成候分ハ證據上生し候事ニ而少しも残念ハ無之事

歟と奉存上候

前文之申上を無理からぬ事と御聞上ケ被遊候得ハ何卒今日中ニ御人

撰御申付可被成遣奉願上候右様被仰付被下候得ハ小生一身上ニ取り候而

ハ申上候迄ニハ無御座候得共屹度擔當不分晝夜盡力仕候間左様御聞置可

被成遣候

此度之事件ニ付而ハ英人之狡猾と盡力とニハ實ニ驚入申候狡猾ハ左も可



有御座候得共實ニ盡力致候事ハ小生ハ心ニ對シ少シハ慙愧仕候尙又日本人ニ早下リ大ヅルケニハ是又驚き申候御一笑可被成下候書外拜謁之刻と申上殘し候也頓首謹言

明治六年九月五日

(權大判事外務省御用掛)  
玉 乃 世 履

大隈參議公閣下

尙々證人呼出等之事件ハ小生委員之職掌ニハ無御座外務卿ノ職掌ニ  
而其向懸外務大少丞よりも政府へ御伺可申上候處何卒政府ニ被爲置  
候而ハ早々之御運ひヨ御聞届被成候事を小生かとニ於而も懇願之至  
ニ奉存候何故かれハ英國人よとハ大ニ我國人を疑惑せし事不少ニ付  
此度之處ニ而ハ公明正大ニ證據を取り強弱之外ニ眞理を以て貫徹爲  
致度事歟と奉存候也

三五二 三條實美書翰「大隈重信宛」明治六年九月十九日

京都府之事ニ付大至急談度候間早々入來有之度候也

九月十九日

實 美

大隈參議殿

三五二 三條實美書翰「大隈重信宛」明治六年九月十九日

過日内話仕候西郷大將(薩盛)へ拙者内示之儀何れ從來之顛末方今之形勢等紙上

ニ取綴差示度存候間其局ニ於而至密書取出來候様相願度候今日迄も遷延  
致候事故可成至急ニ相整候様頼入候草々不備

九月十九日

實 美

大隈殿



【備考】この書は三條公が遣韓大使として、西郷隆盛に付與せんとする内訓狀の草案を重信に依頼せしものなり、

三五三 三條實美書翰「大隈重信宛」 明治六年九月二十日

京都府事件糾問取掛候ハ、陪審出張大藏省人撰内々取調有之度候仍此段申入置候也

九月廿日

實美

大隈參議殿

三五四 江藤新平書翰「大隈重信宛」 明治六年九月三十日

二白本文議官代理ノ事ハ不得止姑息法と奉存候間御取捨可被下奉願候事

陪審規則ニ義ニ付御示談ノ義有之拙も參官可仕拜承之仕候就ハ則參官可仕筈ニ處兩三日頭痛ニ困り居處一昨日昨日押出頭仕候故歟今朝來甚手強ク有之候上司法省ハ參り面會談話中ハ頭痛し更ニ一層烈敷相成其末只今ハ書狀相認にも目明兼困り候位ニ甚以恐縮ニ至奉存候得共參官仕兼候○陪審規則出來御運相成候義ハ勿論御同意のミならは若又右陪審規則ニ付司法との權限折合六ヶ敷甚以大臣殿ニも被成兼候御都合も候ハ、皇國政府固リ裁判ノ權も有之候得共彼ノ陪審ノ爲メ御見立有之候正院始左院大藏ノ人物を以即チ内閣議官ノ代理として臨時裁判所へ出席仕候ハ如左職掌相盡サセ有之候ハ如何可有御座哉奉存候

但し此程ノ義先日板垣大木兩參議ノ説も有之候哉と奉存候

一裁判證據ノ有無ヲ決スルノ權

一右ノ外參議出席取扱丈ノ權

但し此廉ハ委敷取調差上度候得共頭ヲ動ス度毎ニ頭痛ニハ不能細筆固



リ不申上候も大體可然哉奉存候事

右義ノ次第御返事旁申進度早々頓首

第九月三十日

二白臥床上大亂筆御高恕奉願候也

(參議) 江藤新平

參議御中

至急御覽

【備考】京都府事件を判決する臨時裁判所の陪審規則は、司法省と正院との間に交渉數回にして、參座規則と改まり、十月九日決定公布せられ、正院、左院、大藏省の三方より參座九人任命せらる、この書は右規則制定に關する江藤の意見なり、

三五五 南部廣矛書翰「大隈重信宛」 明治六年十月十日

謹啓

閣下益御安泰被爲在奉拜賀候陳も廣矛儀戊辰已來菲才不肖を以奉汚重任殊ニ昨壬申九月當縣參事轉任拜命之際貫屬之情態等頗難事迎も微力不堪其任存候得共朝命之重キ死ヲ以誓イ赴任仕候已來新置縣後之所置振熟視候處藩習依然新縣之體ヲナサス且貫屬扶助之方へ石高金拜借殘リ御渡有之所置方此條渡邊大丞へ御質問被下候ハ、分明ニ付略ス其他米金出納等頗混雜夫々之所分焦慮仕候得共何分舊藩已來之官員依然ニテハ改正之見据更ニ無之ニ付當夏出京之砌官員交換之儀相願候處御聞届被下夫々御仕向相成當七月已來日夜新任官員合議取調候所處置難件不少即今專ラ見込ヲ付伺候心得ニ候然ル處右官員交換且石高金所置方其他新縣之體ニ改正等舊習洗除候ヨリ彼是ト流言自然尊聽ニ達候儀可有之哉右改正并米金出納等之儀ハ却而御本省ノ正規ニ照準し取計又石高金所置も今日之際ニ當リ出格之所分等ハ出來兼候譯ニ此儀ハ兼而渡邊大丞打合之上取計候儀ニ有之尤舊弊洗除改正等ハ必多少物議ヲ生シ不人望ヲ極メ可申不良之貫屬共種々之流言誹謗素



覺悟ニテ罷勉從事仕候儀ニ有之候間萬一御異聞且御不審ニ廉等被爲在候節ハ速ニ廣矛御招呼一夕事情御糺問被下候ハ、具狀言上可仕候然ル上ハ如何様ニ御譴責モ甘テ拜受可仕候條此段兼申上置候心緒御洞察奉仰候誠惶頓首百拜

十月十日

(靜岡縣參事) 南部 廣 矛

參議大隈公閣下

三五六 岩倉具視書翰「大隈重信等宛」 明治六年十月十五日

朝鮮一件云々如何ニモ苦慮ニからぬ迄も人事ノ限りニ盡し申度事ニ御座候條御兩卿中深く御高慮御示談ニ上明朝九時比御同伴御出被下度候其上不行時ニ天之命ニ致方無之何分不一方御勘辨有之度如此候也

(十五日) 三五五

具 視

大隈 殿  
伊藤 殿

昨日も行違伊藤氏計入來今朝も同斷大隈氏而已御出殘心候明朝同時必御同伴可給候否正可成御返事令承知候也

【備考】この書、竝に伊藤が是月十七日に岩倉公に與へたる書は、征韓問題に於て、岩倉公が如何に深く大隈伊藤兩人の盡力に囑望せしかを見らるるものなり、

三五七 岩倉具視書翰「大隈重信宛」 明治六年十月十七日

昨日來段々御苦慮爲天下欣然ニ處唯今條公入來斷然決意不可動次第談話跡反對如何ニモ致方無之小生退職ニ事ニ決シ相分レ申候附ハ足下ニハ是迄ニ引續も有之候事決して卒爾御進退無之此上可成丈御輔ケ被申上候事偏ニ企望致シ候窃ニ可有如何哉と懸念ノ御口氣も有之候事故臣去ルト



雖モ爲天下頻ニ令懇禱候不取敢内々一筆申入候前條今日之所ニ而ハ尤決  
テ御洩シ無之様御心得可被下候早々以上

十月十七日

具 視

大隈參議殿

尙々御都合今晚明朝之内御出被下度候也

【備考】具視の意行はれず、征韓の廟議決定せしを以て、具視その職を辭せんとし、重信にその意を告げ、重信には踏み止まりて條公を輔佐せんことを囑せるものこの書なり、

三五八 大江卓書翰「大隈重信宛」 明治六年十月十七日

御密覽

拜呈寸楮候益御清福可被成御起坐奉拜賀候陳ハ今朝上野(兼池)外務少輔ニ面會  
致候處先般之洋米行之念慮今ニ有之候哉然ル時ハ此頃能き都合も有之候

間承知致度よし申聞候ニ付私身上之儀ハ巨細閣下へ申上置候間御相談被  
成下度相答置申候右洋米行之儀ハ先般も内々申上置候通ニ而年來之素願  
ニ有之然ルニ先般縣内之紛紜も有之候間一時指止今一應盡力仕度段申上  
候儀ニ御座候故此度之儀ハ只閣下之御指令ニ相應候様仕度存念ニ付今後  
私身上之方向ニ如何仕可然哉御指令被成下候様奉懇願候尤も先般上野之  
嘶ニハ總領事ニハ六ヶ敷候間領事ニ相轉候様申聞候處篤度熟慮仕候ハ、  
政府之命おれ心致方も無之候得共我ハ願而却退致候譯も有之間敷且多  
少之名譽ニも相管し候儀ニ付他人ニハ申難儀ニハ御坐候得共心腹吐露仕  
候間右等之處も御斟酌被成下度然ルニ右ニ無他之心を以只先生之厚志ニ  
不憚申上候儀ニ付何卒方向御指揮偏ニ奉願候いつを不日參堂親しむ可受  
御指令候得共此段前以申上置候間若上野氏ハ御相談申上候得可然御談  
合奉願候

一過日指上置候新聞之譯書出來候間即指上申候御落掌奉願候



先右迄申上度如此御坐候頓首謹言

第十月十七日夜

(神奈川縣令)  
大 江 卓

大隈公閣下

三五九 參議達書「大隈重信宛」明治六年十月十八日

大事件出來候ニ付明十九日第九時迄ニ無遅々御出仕有之度此段申入候也

十月十八日

參 議

大隈 參議 殿

【備考】この日早曉太政大臣三條實美、征韓論決裂を憂慮の極劇疾を發し、人事不省に陥る、この書これに關するものにあらざるか、

三六〇 木戸孝允書翰「大隈重信宛」明治六年十月二十日

病臥中大亂毫御高恕

爾後彌御清榮奉大賀候さて去八月三日三條公より臺灣朝鮮之云々御下問有之 皇國今日之形勢を想回し不堪驚歎奉存候ニ付口を極免御直諫申尙安堵難仕候ニ付直ニ參堂拜青之上縷々微衷を陳述仕候其後不圖變病ニ相係り逐一近況も窺候事不相叶候得共何歟不安奉存候ニ付義務民を撫(三條岩倉)むるより先あるハあし方略ハ力を養ふより先あるハあし之ニ條を主とし三岩二公ニ上言仕候然る處近日内閣紛紜條公ハ御大病ニ被爲臥候よし國家多難如此大不幸ハ無之痛歎泣血仕候りゝる時こ驥尾ニ隨ひ死力之限り相盡し度平生之素願ニ御座候處起坐も獨り自由あらざる之仕合殘憾之至ニ御座候幸ニ岩公始大久保も憤勵盡力候よし爲天下不堪欣躍候何卒乍此上御盡誠機期御大切ニ萬禱仕候

一先達る京都府と京都裁判處との云々ニ付愚意申上其後江藤參議(新平)へも三



兩度愚論陳述仕候處一向貫徹も不致然る中終ニ<sup>(正座)</sup>榎村參事も臨時裁判所へ  
拘留と頃日相成候よし孝尤も今日尙汚朝官居候ニ付<sup>も</sup>朝廷之御不體  
裁を不忍傍觀且榎村ハ同國之もの也友人也以理抑制せらるゝを見て不忍  
默止今日別紙寫之通上書仕候餘意五條ハ述<sup>る</sup>副啓とし諸參議之案下ニ呈  
し候併<sup>る</sup>御熟覽之上速ニ御詮議有之度萬願仕候是又人たる之情實御憐察  
可被成下候草々頓首

十月二十日

尙々自然御取込ニも被爲在候ハ、御代筆ニ<sup>も</sup>不苦候間御一答奉願候

木 戸

大隈様 御内披

【備考】臨時裁判所は十月十四日始めて開延せられしが、京都府參事榎村正直  
の態度傲岸、其の陳述甚だ不明なりとて、遂に吟味の都合の名のもとに  
十七日之を拘留す、これ木戸が大に憤慨し上書せし所以なり、其の結果  
十月二十五日右大臣岩倉具視は特命を以て拘留相解くべしとの旨を、

司法省に傳へ、榎村は在獄一週日にして縲紲の苦を免かれたり、この特  
命の處置に就ては司法大輔福岡孝弟、三等出仕島本仲道、同樺山實綱等  
は司法權の前途を慨し、各上表して其の職を辭すに至る、

三六一 岩倉具視書翰「大隈重信宛」 明治六年十月二十三日

今日 皇居參入一件

叡慮相伺候處國家之重事深ク御熟慮可被遊旨ニ<sup>も</sup>明朝九時御返答爲伺  
參内之趣御沙汰候尤御掛念之筋ハ毛頭無之候就<sup>る</sup>ハ辞表差出候輩并所勞  
不參之人々明朝處分可致候又若伊藤<sup>(博文)</sup>出頭有之候ハ、速ニ拙宅<sup>に</sup>入來之  
事御申聞可被下候今夕ハ御入來被下候事と御待申候仍<sup>も</sup>早々如此候也  
十月二十三日

具 視

大隈重信殿

【備考】具視、三條に代つて太政大臣のことを攝し、是日拜謁、征韓の議の行ふべ



からざることを詳かに奏上す、その要は次のごとし、

【参考】 岩倉具視奏聞大要 明治六年十月二十三日

辛未ノ冬特命全權大使ノ命ヲ辱フシ使ヲ歐米各國ニ奉ジ今般歸朝復命スルヲ得タリ抑奉使ノ事實ニ國家重大ノ事件ニ係ルヲ以テ焦心苦慮勉テ聖旨ノ貫徹センコトヲ期シ歐米各國ヲ歷聘シ其帝王ニ謁シ聖旨ヲ口陳シ其大臣ニ接シ我カ政府ノ期望スル所ヲ論辯シ條約改正ノ目的ヲ謀ルニ之ヲ改正スル事一大至難ノ業ニシテ理論口舌ノ能ク致ス所ニ非ス到底實效實力ニ非ラサレハ我カ期望スル所ヲ達スル能ハス而テ其實效實力ヲ著ス徒ニ彼ノ皮相ヲ學ヒ其體面ヲ修飾スルノ能ク致ス所ニ非ス必ス國政ノ整備ヲ務メ民力ノ富贍ヲ謀リ文明進步ノ道ヲ盡スニ非ラサレハ之ヲ著スコト能ハス今我カ國文明ニ進歩スルノ名アツテ富強ノ實未タ備ハラス之ヲシテ充備ニ至ラシムル亦功ヲ旦暮ニ期スヘキニ非ス實踐ノ經歷ニ依リ歐米各國形勢ノ大要ヲ案ス

ルニ國勢、民力、政教治務其由ル所ノ者根柢深ケレハ枝葉自ラ茂レルノ理ニ出テサルナシ故ニ我カ政治ノ急務トスル所專ラカヲ此ニ致シ意ヲ此ニ留メ奮勵從事セサル可カラサルノ旨趣ヲ上奏セリ然ルニ本月十四日內閣ニ於テ朝鮮遣使ノ議ニ會ス三條太政大臣及具視ハ事ノ先後勢ノ寬急ヲ慮リ宜ク順序ヲ追フテ以テ可トスヘシ今俄ニ使臣ヲ發遣スヘカラスト論ス衆參議皆之ニ同意ス然ルニ西郷參議獨リ速ニ使ヲ遣ルコトヲ主張ス大久保參議大隈參議ヲ除クノ外ハ議論稍ク動キ其事決セス十五日又其事ヲ議ス大久保、大隈、大木三名前議ヲ執テ動カス衆參議ハ西郷ノ論ニ同意スルヲ以テ太政大臣モ竟ニ其議ヲ可トス是ニ於テ具視カ説全ク行ハレス或ハ國事ヲ誤ランコトヲ憂惧シ病ニ依リ朝セス十七日夜太政大臣ハ具視ノ第二來リ情由委曲ニ告ケ大ニ前議ヲ悔ユルノ語アリキ十八日拂曉同氏病ノ將ニ發セントスルニ際シ使ヲ具視ノ第二送り國ノ大事ニ任シ意見一ナラス惶悚ニ



堪へサルノ旨ヲ謝シ再ヒ事ヲ執ル能ハサルヲ告ク此際ニ於テ辱クモ  
車駕親臨聖諭ヲ奉ス感激ノ至ニ堪ヘス具視議論ノ合セサルノ故ヲ以  
テ家居スルコト能ハス具視カ意見ト議事ノ顛末トヲ奏聞シ謹テ聖斷  
ヲ仰キ勅命ニ依リ太政大臣ノ職務ヲ代理シ各官ト與ニ聖旨ヲ奉承シ  
職ヲ盡シ以テ宸襟ヲ安ンシ奉ラント欲ス岩倉公實記

【参考】 伊藤博文書翰「岩倉具視宛」 明治六年十月二十三日

今朝大隈ヨリ事情詳ニ承知仕候博文此際不顧一死唯願クハ閣下確乎  
不拔朝憲ノ立ツ所ニ深ク御注意有之度一言一語モ國家ノ存亡ニ關ス  
ルハ眞ニ此秋ニ御座候誠惶頓首

二十三日

博 文拜白

岩相公閣下

三六二 史官書翰「大隈重信宛」 明治六年十月二十五日

別紙ニ通式部寮ヨリ及御達候ニ付而本日第四字臨御被爲在候間御所勞  
中ニ候共押テ御出頭有之候様可申入旨右大臣殿御下命ニ付此段申上候也

明治六年十月廿五日

史 官

大隈 參議 殿

【参考】 大久保利通書翰「伊藤博文宛」 明治六年十月二十五日

花墨拜讀被示聞趣逐一拜承仕候就而猶又御内談申上度義有之付今晚  
六字頃ハ大隈子方へ御出懸被下候様奉願候幸同人も相見得候付相約  
置候此際ニ乘シ字迄迄事ニ相成候而實ニ天下ニ面皮も無之  
候付十分廟堂上ニ目的確定其實跡を舉ケ政府ニ基礎相据候迄ハ一步  
も不讓決心不相付候而相濟不申候付厚ク固め置申度當分ニ處ニ  
ハ御職外ニ事ヲ思食も可有之候得共先今日迄ハ私ニ御懇親上ヲ以御



相談申上候付左様御聞取可被下候依る今日之小生も不參仕候此段御願申上候早々如此頓首百拜

十月廿五日

利通

博文賢臺下

【備考】

征韓論破裂後の善後策を議せんがため、大久保は伊藤を重信邸に招き、三人にて諸事を協議し、閣員の一致を計り、政府の基礎を確立し、時局を匡濟せんとする、この會合より三人の意志は完全に疏通し、相提携して國事に當ることゝなれり、大久保日記に「二十五日今朝黒田の訪篠原子云々ノヲ談ス、十一時歸宅大隈子入來、岩倉公ヨリ云々ノ御相談云々御答申上ル、六時ヨリ大隈子に伊藤子示談ニ因テナリ、至尊御輔導云々之事大臣殿其體ヲ得ラレ候事、同僚同心協力云々之事、三ヶ條相談イタシ同意ナリ」とあり

【參考】

岩倉具視書翰「木戸孝允宛」明治六年十月二十六日

昨日來度々御懇書之所能御請無申譯事ニ候得其實ニ御用繁意外之

事乍ラ失禮候然ハ御登用人撰之事一昨朝始る大久ト申談シ同人見込モ承リ少々異同有之何分伊藤申談シ返答有之度申置候處同日夕伊藤入來大久示談之上ニ返答云々承り只司法卿之所三人見込相異小生決ヲ取候様トノ事ニ付小生大木ニ決シ申候次第右等ハ一昨夕昨朝ニハ貴卿伊藤ヨリ御聞之事ト存居候次第併昨日彌御發表ニ付一筆爲念申入候事ニ候然ルニ大藏卿之所云々丈御申越其外ハ御異存無之旨ニ被窺思召トシテ赤坂參入且夫々御用 召申付候事ニ候右ハ大久決而大藏之所御請不被申義カネ々々承置候故折角來示ニ候得共不被行事ト決定候其後御書赤坂歸路一見候得共既ニ夫々御用召參仕居無致方取計候昨夜御書モ同斷候尤大久伊藤にも都而打合候事ニ候乍去免官之方後日之事ト申約定相成居候得共小生百方思慮候所速之方可然相考獨斷相決シ夫々御沙汰相成申候扱條公辞表之事ニ付森寺云々此義ハ兎モ角條公辞表所勞計之方大ニ可然存候間折角御談申候得共是非



御所勞而已ニ御書改メ之事御用意可給候十八日カ十九日カ丹羽使者トシテ入來口上覺ハ同人ヨリ申請居候間他日如何之説起リ候モ是ニテヨロシクト存候先入御一覽候仍草々如此候也

十月廿六日

具 視

木戸孝允殿

今程ハ伊藤出頭何モ御聞ト存候過日奏狀少々書改候間此一番差上置候是ハ免官人々一覽ニテモ決テ無子細事ニ付有之儘書付候事ニ候也

【備考】是月二十五日西郷等の辭職により、參議卿の更迭あり、重信參議として大藏卿を、參議大木喬任司法卿を兼任す、孝允その人選を聽くや、他には異議なかりしも、重信の大藏卿兼任に反對し、具視にその意を通す、具視この書を以て、重信の兼任の止むを得ざるの理を説いて、その諒解を求めむ。

三六三 岩倉具視書翰「大隈重信宛」明治六年十月二十六日

先時御面働申入候授賞典祿税之事彌今年冬々之事ニテ最早發表相成候哉承り度存候御一筆御示可給候早々以上

十 廿六

具 視

大隈 殿

三六四 岩倉具視書翰「大隈重信宛」明治六年十一月二十一日

明廿二日十時練兵 天覽ニ付御互九時半頃 皇居參入直ニ供奉可致義モ先達ニ御約束之事ニ候得とも政府上之義も伺物其外段々遲滯兼テ不都合と存候折柄ニ付左ニ通り相分勤仕有之度候

皇居參入



具 視

大久保參議殿

大木參議殿

右凡正午十二時御用濟直ニ政府ヨリ出頭之事

政府參入

大隈參議殿

寺嶋參議殿

伊藤參議殿

勝參議殿

右

但シ明廿二日午後第一時(大隈小)外務宮本開拓堀等(少利官基) 召出シ有之候間御同

席ニ承知致度是又御心得迄申入置候早々以上

十一月廿一日

具 視

大隈參議殿

三六五 伊達宗興書翰「大隈重信宛」 明治六年十二月四日

拜啓益御壯健奉拜賀候然モ廣島縣下鏡山受負稼之儀ハ已ニ昨秋御省ヨリ御決議其后調査彼是ニ往復有之當四月大坂長堀貳町目津田達藏ヨリ受負稼之儀御許可ニ相成候處尙又工部省見込等有之遷延シテ去ル廿日全御決定之御指令相成候付今月中旬可引渡積リニ相達置候尤是迄之運ヒ合も有之今日ニ至リ今更甚不都合迷惑之至奉存候右更ニ御詮義之儀ハ推知不仕候得とも自然定額金員寡少之論ノ起リ候譯ニハアルマシキヤ巨額ノ金高ニ立至ラステハ不都合ノ事ニモ候得ハ今一層増加之儀可申聞歟元來右鏡鑛從前ハ無利之處精々勉勵改正ヲ加エ近日費用減少漸鏡價騰貴等ニテ御益も相立候得とも今年ハ又四ヶ度ノ洪水ニテ堀溜ノ砂鏡流失等其外營繕等



ノ失費巨多ニテ痛憂之事不少折柄昨春來之手續ヲ以テ程能御利益之順序  
ヲ申立右津田達藏へ金拾萬圓之定額豫備ト申聞候得とも小生元來之見込  
ハ三十萬圓金豫備ナラテハ御省へ申陳候儀モ有之事ニテ其含ハ粗受負之  
者へ申聞候儀ニ御座候何分彼是御評決變リト相成候之地方實際ノ目途  
モ難立甚迷惑仕候付乍慮外呈書御賢慮奉伺候別ニ御繁務之御中恐縮あり  
ら奉乞尊答候恐々謹言

明治六年十二月四日

廣島縣權令

伊達宗興

大隈公

閣下

又曰本文之儀表向御受書差出尙迷惑之儀上陳仕候得とも御直ニ鄙書  
ヲ奉呈奉伺候儀ニ御座候以上

三六六 陸奥宗光書翰「大隈重信宛」 明治六年十二月七日

私義兼而湯治相願ヒ豆州熱海ニ於て加養罷在候處兎角全癒ニ至兼候ニ付  
今二周日之間更ニ御暇相願度候則ち別紙ヲ以テ史官へ願書可指出候間御  
指支無之上ハ其筋へ御下命指出方御申付被下度尤も御用多之時期ニ付右  
日限中より共快方ニ相成候上ハ速ニ歸京仕候心得ニ御坐候先ハ右相願度  
如此ニ御坐候以上

明治六年十二月七日

(大隈大輔心得)

陸奥宗光印

大隈大藏卿殿

三六七 大江卓書翰「大隈重信宛」 明治六年十二月七日

呈寸楮候一昨宵ハ昇堂高話拜承仕難有仕合奉存候其節略申上置候九州行

大隈重信關係文書第二 (明治六年十二月)



申附候野村の報告昨日御座候處差たる事件も無之候得共御承知迄呈上仕候拜答申上置候各所之密偵ニ御遣之儀之岩公ニ御嘶被爲成候哉退テ熟考仕候ニ仙臺邊の土國の方先ツ急ある方可然歟附而土人弘田某事可然人物ニテ當稅關奉職罷在候間當人之歸省ニ托して探偵致候ハ、大様相分可申と奉存候素り奥州派出之人物も御座候間御指揮通取計可申と奉存候いつを不日出京仕候間夫迄ニ御打合置相成候様仕度奉存候  
一生系改會社頭取共ニ昨夜示談仕候處猶同人共協議之上書面を以可申立趣ニ付十日頃迄ニ頭取之内三兩名召連出京萬事可申上候間夫迄之間ハ御布告御達之儀御見合相成候様御合置被成下度此段書面を以不取敢申上置候右申上度勿々頓首

十二月七日

大隈公閣下

大江 卓拜

三六八 大江卓書翰「大隈重信宛」 明治六年十二月十日

寸楮拜呈仕候昨宵も昇堂生糸會社一條ニ付縷々申上且今朝租稅寮へ罷出猶又松方氏へ縷述仕置候處右會社廢立の義ニ付テハ澁澤氏も見込之筋有之候間今一應會社之ものを兩人ニ而説諭し可相成ハ瓦解不相成様仕度右ニ付今夜も罷出兼候間明早昇樓仕度御都合伺申候尤今夕會社之ものを共昇堂可仕筈ニ有之候哉も承知仕候間若罷出候ハ、無御面會私旅宿へ罷越候様御申附被下度此段乍失敬以書中申上候頓首

十二月十日

大隈公閣下

御直展

大江 卓



三六九 岩倉具視書翰「大隈重信宛」 明治六年十二月十三日

只今以愚息申入候件々夢々不可由斷事と存候萬事先ンズルト先ンゼラル  
ルト其間ノ得失至重至大ニ付條公三木中速ニ御密談十分御手配リ有之度  
候但シ夫迄先貴卿伊藤氏ト御懇談之上木戸必死ニ振ハマラレ候様有之度  
其上御内評可然存候尙其上條公方ニ而木戸氏計ニ而も

黒多(多) 開拓

伊知地正治

山縣 陸軍

鳥尾小彌太

河路 警保

右等其外壹人宛る又一同ニ而も厚御依頼御内談候ハ、緩急之時可然ト存  
候是等尤根本大切之事ニ付伊藤御談シ之上片時も早く御運ヒ有之度候全  
體之所少々御由斷之様ニも相心得候早々以上

十二月十三日

具 視

大隈 三木 殿

追申地方官集會早キ方大ニ可然存候事

三七〇 關新平書翰「大隈重信宛」 明治六年十二月十四日

謹る啓上仕候逐日寒氣相増候處愈御健勝御奉務可被爲有御座奉敬賀候次  
ニ野子ニも跡月三十日着縣碌々消光罷在候間乍憚御降意被成下度候附る  
と當夏以來屢々申立置候檢事局与之間權限之一條先達中司法省同局迄  
御達有之其大意と現行犯罪且人之告知スル犯罪之者ヲ致捕縛候分檢事之  
權内与有之右ニ付未發ヲ搜索シ致捕縛候儀ハ自然与地方官之所任与相成  
候ニ付縣下之折合餘程宜敷先ツ此之分ハ大ニ安心之場ニ相到リ申候然處  
近來臨時裁判石井權少判事外三四名當地へ出張有之何等之事歟都合承リ



合候處舊水戸城放火之一件最前司法島本大丞初大島少判事其外等之見込  
 とて大ニ致相違云々紙ニ追テ言上可仕候筆此度當地ニテ誰彼口々夫々一通リ  
 取糺シ歸京之上ハ速ニ御處分云々云々之次第ハ前同段夫レ當縣下之儀ハ先年來事故  
 紛紜之末与と兼テ御照覽も被爲有御座候通り依テ此度一件之御處分振リ  
 其趣ニ從リ候も又々不容易大患引興リ可申縣官之瓦解も不能申上ニ昨  
 夏以來渡邊大藏大丞入縣如此迄之盡力正院之建言人民之說諭等全ク  
 水泡ニ屬シ管下ハ忽又黨派之爭場与相成ル事懸鏡如見野子等何も今日敢  
 る一身上ニ於テハ更ニ顧ミも不申候得共深ク爲國家憂念實ニ不安寢食程  
 ニ有之依テ速ニ先ツ事ヲ未萌ニ拒キ道ヲ將來ニ開キ上ハ以テ 朝廷之御  
 爲め下ハ管下人民之上ニ於テ可相成ハ甚々敷難義ニ不立到様豫め仕置度  
 乍併し事件柄今何分ニも公然建白も申上兼其上又書面上等ニテ迎も相  
 碎ル情實ニ無之就るも頃日歸縣差付又々出京如何敷も御座候得共前件之  
 次第も實ニ不容易事柄ニ付是非一應賜謁見ヲ逐次上陳尊慮相伺置申上度

明日夕纔時立歸之積リニテ上京可仕心得ニ御座候此旨前以達し御聽ニ置  
 申上候間敢テ自儘ニ出候譯ニ無之候へハ何卒宜敷御聞置被下置度偏ニ奉  
 希上候書餘拜謁上萬縷草々頓首

十二月十四日

新(天城縣事) 平

大隈 參議 殿

閣下

三七一 伊東武重書翰「大隈重信宛」 明治六年十二月十五日

名東縣着御届

本月八日付ヲ以申上置候過去ル九日愛媛縣出發名東縣高松支廳ニ立寄リ  
 同十二日本縣到着仕候當縣之儀西讚ハ愚民騷擾シ餘弊加之牛疫流行東讚  
 北阿ニ非常之水害南阿淡路ニ稀有之旱損且淡路ニ牛疫流行管内三國共事



情異同有之候得共先ッ概シテ凶年ニ有之縣官於テモ苦慮不一方趣ニ御座候尙詳細之儀ハ歸京之上可申上候就テハ最早四國御用モ一ト通相濟候ニ付速ニ歸京可仕之處紀州之儀ハ同ク南海道之儀一部ニテ事情關涉之都合モ有之及視察度又大坂造幣寮之儀ハ本務上關係モ有之候ニ付幸之折柄實地見聞致シ度尤其段正院へ上申致シ置候間此段御報知旁申上置候也

明治六年十二月十五日

記錄助 伊 東 武 重印

大藏卿大隈重信殿

三七二 岩倉具視書翰「大隈重信宛」明治六年十二月二十日

兼テ御見込一般ノ家祿六七年分云々其請願ニ任セ候との事速ニ御取調ニ組御認今日ニも御廻し被下度候實ハ異論之方も可有之候得とも小生ニハ是非被行候様有之度必先御廻し被下度候

官祿税之事是も早々御取調させ御差出し被下度是も議色々有之六ヶ敷物ニ候得とも何分早々御見込御書付させ被下度候  
あて御尊歳出入惣會計取調書出來次第御差出し被下度是も一日大評議可然存候

小生今日も不參恐入候得とも明後日ハ出仕可致候條公ニも今日ハ皇居參入廿二日ハ政府出仕恐悅此事ニ候右早々如此候也  
十二月廿日

具 視

大 隈 殿

追伸本文ノ義内外打明申入候條御含可給候也

【備考】明治六年十二月二十七日、假に家祿税を課し、家祿賞祿還納の制を設く、明日奏任以上に官祿税を課す、勅任は十分の一、奏任は二十分の一、何れも陸海軍費に充つるためなり、翌七年五月十三日、七年度歳計概算表を領つ、これ豫算を領つる第二回なり、



三三三 三條實美書翰「大隈重信宛」 明治六年十二月二十八日

評議有之候間明朝八字愚亭へ御集會可有之候也

十二月廿八日

追而刻限無遅々必ス御集會可有之候事

實 美

大隈 參議 殿

【備考】大久保利通日記、十二月二十九日の條に「今朝八字三條殿に參上、參議一

同參坐被止了ニ御評議有之彌決定相成候」とあるものこれが、

三七四 鳥山重信届書「大隈重信宛」 明治六年十二月二十八日

管下伊賀國動搖之儀御届

近來所在說教講社取結之儀ニ付而之區々之巷説モ有之候得共素ヨリ搖動

等釀成候程之景況之無之候處昨廿七日午後第十一時伊賀國上野支廳詰之者之管下第九大區伊賀國阿拜郡西山村百姓共動搖之姿勢有之趣本月廿六日午後第十一時頃同國上野支廳之風聞ニ付不取敢同所詰合捕亡吏四名爲探索出張爲致候處村中之者共村内春日之社之屯集捕亡吏ヲ目掛ケ其場有合之薪或ハ礮等ヲ打付剩捧竹等ヲ携相迫リ更ニ一言之應答も相成兼其際捕亡吏之内兩名重傷ヲ被リ無據一旦引取猶支廳詰官員一同再ヒ出張鎮撫方專ラ盡力罷在候得共此餘舉動難計ニ付差向同所住居貫族貳拾名程時宜ニ寄出張之儀達置候旨尤動搖源因未タ分明ナラス候得共最前郡村兼而神宮司廳ニ於テ取結ヒタル講社相立候ニ付從來信心ヲ凝候御嶽講之方衰微スルヲ憤怒致スル事起リ維新講社々中坂本鞘之進ヲ毆擲シ其上同人家財并同村戸長河野木曾右衛門家屋打毀等之處行ニ立至リ候趣急報有之候ニ付顛末實況未分明不致候得其他村之波及等致シ候而之不容易事端不相濟儀ニ付不取敢爲鎮定岩村定高始官員六名其外捕亡吏等召連即刻出張仕候



猶追々事情詳細取調可申上候得共不取敢此段御届申上候也

明治六年十二月廿八日

三重縣權令岩村定高代理

三重縣參事鳥山重信

大藏卿大隈重信殿

三七五 大久保利通書翰「大隈重信宛」 明治六年十二月三十日

益御安固奉敬賀候（正義租稅頭） 今朝松方入來ニ付大坂邊東京之間今一層米買入着手相成義示談貴卿（其親） 御相談申上候約束ニ付多分御聞取被下候半右（其親） 是是非至急御處分被下様偏ニ希望仕候實（其親） 若公大坂邊之説を御聞込ニ（其親） 昨朝も頻ニ年々之相場ヲ以貢租取立候様与之説も有之候義（其親） 有之猶今日も篤与大體之趣意申上外ニ致様ハ決（其親） 無之此上（其親） 米價之平均を得甚敷下落ニ不至様保護スル外無之右ニ就（其親） 而ハ大藏省ニおひて既ニ見込も相立御伺申上候

運ニ相成居且目今之處ハ大坂邊東京ニおひて猶米買上ケ着手致候事ニ相決居候趣申上候處大ニ御安心ニ（其親） 其通目今之處ニ御手相付候得ハ無此上事与御喜色相見得候右次第ニ候間斷然御憤發被下候様御願申上候（其親） 明朝九時（其親） 條公亭（其親） 内閣一同御評議有之趣就（其親） 而右御含ヲ以御申立被下度若御都合相調候ハ、其前一寸御面會候得ハ大仕合ニ奉存候  
右申上度艸々如此御坐候也

十二月卅日

大隈卿

利通

三七六 三條實美書翰「大隈重信宛」 明治六年十二月三十一日

京都府裁判一件今日中ニ決定不致候（其親） 而不相濟次第有之候間今九時必御入來有之度候也



十二月三十一日

實美

大隈參議殿

【備考】臨時裁判所は幾もなく、横村參事の拘禁を免じたりしが、京都府と京都裁判所との確失久しく決せず、廟議横村を轉任せしめんとせしが、木戸大に不平を唱へ、事紛糾す、是日遂に京都裁判所の裁判を可とし、府を非として判決す、横村大に怒り、同志と共に袂を連れて官を去らんとす、木戸深憂して之を慰留す、この書判決前の評議のことにかゝる、

【參考】佛人ブーシエー書翰「岩倉具視宛」明治六年

奉呈一翰候然ハ閣下巴里へ御滞在ノ節拙者儀格別ノ御信任ヲ蒙リ感激ノ至リニ不堪依テ今般歐洲大陸就中佛國ト貴國トノ關係ノ見込ニ於テ貿易上ノ始末柄ヲ上申仕候間閣下幸ヒニ其意ヲ了セラレンコトヲ奉希望候

拙者儀(論明)西岡氏ノ紹介ヲ以テ閣下ノ御面語ヲ忝フ致シ候段今ニ於テ忘却不仕其節閣下ニハ貴國ノ商人ヲ巴里へ御送り被爲成度御思召有之候ニ付拙者御用ニ相立ツヘキ時節モ候ハ、貴國商人ノ爲メニ盡力可仕旨ヲ誓言仕候處爾後貴國ノ商人當地へ罷越候者一人モ之レナキヲ以テ其意ヲ果シ不申候

拙者兼子テ貴國ト弊國合同ノ利益ヲ實視候事ヲ希望罷在其衷情ヲ默止スルニ忍ヒス依テ貿易ノ要件ニ關スル事情ヲ續々開陳可仕ニ付テハ忌諱ヲ憚ラス貴國ヨリ弊國へ廻リ候僅々ノ御國産ハ皆途中數個所ノ手ヲ經候事故弊國へ達シ候頃ニハ其價増加致シ實ニ見ルニ堪エサル事等具狀可仕候是等ハ全ク仲買ノ手ヲ經テ取引方致候ヨリ生スル弊害ニテ其レカ爲メ賣買上ニ不都合ヲ醸シ遂ニハ賣買ノ途全ク杜絶スルニ可至ト奉存候

元來巴里ハ世界中ニテ東洋各國ト產物通商ノ中心ニ有之候ニ付若シ



當府ニ於テモ倫敦府ノ如ク日本商館取設ケノ世話行届キ候時ハ必ス兩國ノ爲メニ莫大ノ利益ヲ生スヘクト奉存候但シ此ノ義ハ拙者ノ愚考ヲ腹藏ナク吐露仕候迄ニ御座候閣下御發途以來御委任ヲ被リ候次第ニハ無之候得共日夜貿易ノ要件ニ心配罷在候ニ付御國産ノ中賣捌ケ方宜クト見定メ候物品ヲ逐一左ニ具陳可仕候

先第一ニ藁等ヲ以テ製造致候敷物類ノ景況ヲ陳述可仕候右敷物類ハ英國ノ手ヲ經テ弊國へ相廻リ候品ニテ英國ノ十軒ノ商家ヨリタルビエールルノナール店ノ如キ零賣店へ積送候仕來ニ御座候右タルビエールト申候ハ巴里市街ノ一隅ニ建設有之候數箇ノ荷庫ヲ所有致シ候者ニテ閣下ニモ拜謁被仰付候仁ニ御座候右敷物ハ二年前ヨリ流行致候品ニテ巴里ニ於テハ賣捌ケ方殊ノ外宜シク候間貴國ノ商館當地ニ有之候ハ、仲買ノ手数料ヲ省キ直接ニ取

引致候者ノ掌握スヘキ利潤ヲ貴國并ニ弊國商人ノ爲メニ生スヘクト奉存候

英國ハ濕氣地ニ有之候間藁類ノ敷物ヲ用ヒ候者有之間敷然ルニ佛國ハ干燥ノ土地柄ニ有之候故此類ノ敷物ヲ求メ候者極メテ多ク候得共當國ニハ此品ヲ所持致候商家一軒モ無御座候貴國開港ノ始メヨリ船主等ハ多ク陶器類ヲ積込ミ英國并ニ佛國等へ輸入致シ候此儀ニ付テハ拙者ノ愚意モ有之其大失策ナル故ヲ辯明仕候間其邊御注意ノ段伏テ奉願候抑々最初差立ニ相成候御國産ハ下等ノ品ノミニテ別段貿易ノ爲メニ製造致候者ニ有之候處其價ノ高直ナルニ因テ人皆其出所ノ眞偽ヲ掛念仕候得共若シ日本ノ商館巴里ニアツテ此同品ヲ賣捌ク時ハ其疑ヒ之レナク賣捌ケ方モ宜シク可相成ト奉存候貴國本製ノ陶器類ハ人ノ珍重スル所ニ御座候得共價ノ高貴ナルニ因



テ此御國產ノ取引盛大ニ赴キ候ニハ尙數年ヲ要スヘクト奉存候  
貴國ノ產物ニテ實ニ財源トモ可相成ハ漆器類ニテ年中賣捌ケ方絶エ  
ス候得共就中十二月ノ月ハ世間ニ進物ノ行ハル、時ニ有之候故此月  
ノ賣レ方ハ格別ニ御座候佛國ノ婦人等ハ皆手套、糖菓、粧飾具、古切等ヲ  
入レ候日本製ノ手箱ヲ人ヨリ受候ヲ第一ノ面目ト致候儀ニテ婚禮ノ  
贈物ニハ塗物類ヲ用ヒサルヲ無之概言致候得ハ巴里人ノ住スル家室  
ニ日本製ノ家具ヲ備ヘサレハ其室ハ充分ニアラスト申候テモ過言ニ  
ハ無御座候  
又上製ノ扇子ハ人皆珍重致候得共價ノ高貴ナルニ因テ賣レ方悪ク只  
通例ノ扇子并ニ櫻欄ノ葉ヲ以テ製シ候扇子ハ安直ニ有之候故賣レ方  
至極宜ク有之候  
又縫模様附ノ絹地類ハ弊國ニテ甚タ貴重致候故僅カニテモ其品ヲ所  
持致シ候家有之候得ハ人忽チ購求致シ室内ノ飾具或ハ帷帳等ニ用ヒ

候且此品ハリヨンヨリ巴里へ相廻候縫模様附ノ絹地ニ代用致候  
右ノ品物ヲ購求致候者常ニ出所ノ眞偽ヲ疑ヒ候ニ付キ若シ此弊ナキ  
時ハ其賣捌ケ方宜シク可相成ト愚考仕候此儀ハ弊國家具匠諸大家ノ  
説モ同様ニ御座候  
又縫箔或ハ縫模様ヲ施シ候日本製ノ屏風類ハ賣レ方至極宜シク有之  
候  
又絹類ノ内ニテ賣レ方尤モ宜シク且ツ貴國商人ノ爲メニ利潤多キ品  
ハ生糸ノ儘ニテ緻密ニ織リ候絹地ニテ弊國ニテハ之レヲ「チュゾル」ト  
名付ケ小反物ニテ當地へ輸入致シ候得共其分ニテハ不足ニ付キ尙倫  
敦ヨリ取寄候次第ニテ當國ノ好事ナル婦人ハ皆此風雅ナル絹地ヲ衣  
裳ニ用ヒ候故巴里一府ノ賣レ高ハ歐洲一般ノ賣レ高ヨリモ多分ニ御  
座候  
其他貴國ノ產物ニテ賣レ方宜シク且利潤ノ多キ品ハ枚舉ニ違アラス



候只貴國ノ爲メニ惜ムヘキハ英國ヨリハ却テ佛國ニ通商貿易ノ意ヲ屬スヘキニ其儀無之事ニ御座候

拙者儀閣下特別ノ御主意ヲ以テ巴里在留ノ貴國諸君子ノ御用達ヲ拜命仕居候得ハ兩國通商ノ妨害トナルヘキ事故ヲ吟味致シ之レヲ除去可仕手段ヲ工夫候ハ拙者ノ義務ト存候ニ付猥リニ建言仕候段御宥免可被成下候

拙者儀巴里ニ於テ貴國貿易ノ利害ニ關シ候事ハ如何ナル事ニテモ我國ノ利害ニ於ケル如ク實意ヲ以テ精々盡力可仕心底ニ御座候

拙者儀ハ千八百六十一年始メテ大使ノ巴里ニ御着相成候時ヨリ知音ヲ忝フ致シ候事故常ニ貴國ノ事ヲ思ヒ爾來巴里在留ノ貴國人并ニ歐洲各國御派出ノ貴國諸公使ト商用ノ外常ニ通信罷在候  
閣下巴里御逗留ノ節拙店ニ貴國ノ少年二名罷在候處不圖シタ事ヨリ右二名ノ者ニ別レ候ハ實ニ歎息ノ至リニ御座候右一名ハ上島ト申シ

又一名ハ竹村ト申シ兩名共佛國ノ商法ニ仕込ミ候處上島ハ日本ニ歸國致シ竹村ハ當今マルセイユニ居住罷在候兩名共巴里ヘ罷在候間ハ拙店ノ用ヲ勤メ其給料ヲ以テ全ク露命ヲ繋キ居候事故遠地ニ隔絶罷在候テモ兩名共今ニ尙其恩ヲ忘却不仕候

貴國ノ少年ニテ商法ニ有志ノ輩有之候ハ、何時ニテモ拙者引受拙店ニ備入候カ又ハ何業ニテモ拙者儀ハ世間交際ヲ博ク致居候得ハ其者ノ好ミニ任セ他ノ商家ニ世話可仕候間此段爲念申上置候

拙店儀ハ兼子テ時機サヘ有之候得ハ閣下ノ御厚意ニ可奉報志願ニ付此段御賢察ノ程伏テ奉願候恐惶謹言

問屋商人税關検査係兼巴里府検査係

ブーシエー

岩倉右大臣様閣下



大隈重信關係文書第二 (明治六年十二月)

明治七年

自一月  
至八月

三七七 太政官報告書

大隈重信宛 明治七年一月四日

熊本鎮臺兵暴動ニ及候趣白川縣ヨリ別紙之通届出候條不取敢申上候也

第一月四日

大隈參議殿

熊本鎮臺兵暴動ニ付御届

當地方熊本鎮臺歩兵第十一番大隊之内本月廿一日午後第六時比ヨリ遽ニ暴動營内及破毀尙二十二日右同時刻比同様暴動候ニ付熊本中諸寺院へ引分ケ士官付添取纏メ有之由尤縣下市街等都テ別條無之勿論士民之カ爲動搖等之儀無之候得共不容易事件ニ付不取敢及御報告申候猶委細之儀云

大隈重信關係文書第二 (明治七年一月)

二百三十一

外史



同臺ヨリ可申上事ト奉存候此段申上候也

明治六年十二月二十三日

白川縣權令安岡良亮

太政大臣三條實美殿

三七八 岩村通俊書翰

〔大隈重信宛〕

明治七年一月十四日

謹白昨日拜別後直ニ横濱行(高俊)愚弟ニ面會彼一條申入候處些異論も有之候へ共到底御請可仕見込ニ候間此上も閣下ニ御英斷奉待候兄ニして弟をすむ憚るへきニ似ふりと雖通俊一點之私あるニあらば假令人之笑を取るも中心不愧所なり幸ニ閣下察焉兼申上候通速ニ御處分奉内願候也

一月十四日

(佐賀縣權令)

通俊

大隈先醒

閣下

【備考】 通俊、高俊は兄弟にして舊土佐藩士なり、是月二十八日高俊佐賀縣令に任ぜられ、兄通俊に代る、高俊時に神奈川縣權參事たり、

三七九 吉田清成書翰

〔大隈重信宛〕

明治七年一月十五日

光田紀三郎へ探索方相托置候猶老臺方も一層委しく御委命被成候様存候間差出候間潜ニ御逢ひ被下度候餘ハ拜眉可申述候也  
一月十五日

(大藏少輔)

清成

重信老兄閣下

二白岩公も餘程快方ニ御座候歸リニ大久保と一緒ニ相成候付彼宅へ鳥渡立寄候へハ木戸先生參り被居候御含迄申上候  
至急之義を候へハ何時ニ亦も參樓之心組ニ御座候間右様御詳知可被



下候

三八〇 富岡敬明書翰「大隈重信宛」 明治七年一月十六日

敬明不肖ノ身ヲ以テ職ヲ山梨縣ニ奉スル以來頑民暴動等ノ儀素ヨリ其任ニ勝サルノ所致ト深奉恐入爾後聊前罪ヲ贖ヒ候積ニテ身力ノ限リ勉強罷在候得共未タ寸功ヲ不奏不堪慙愧之至然處豈圖ヤ客年ハ蒙御拔擢愧悚交到不知所措畢竟閣下御眷顧故之儀ト重疊奉感佩候乍老年一層奮發期報効申候先ハ右御禮奉申上度捧愚札候頓首謹言

明治七年一月十六日

(山梨縣事)  
富岡敬明印

大隈公閣下

追テ當權令藤村紫朗儀入縣以來諸事改革大ニ治功ヲ奏シ舊令ノ時ニ比スレハ實ニ霄壤ノ如シ委詳ノ儀ハ大藏省へ上申等ノ事件ニテ御承

知モ可有御座奉存候伏テ冀ハ右事功ニ對シ同人昇級ノ儀何ントカ御詮議被下候道ハ有之間敷哉於然ハ同人ハ勿論於下官等モ重疊難有仕合奉存候此段御内々奉懇願候也

三八一 三條實美書翰「大隈重信宛」 明治七年一月十七日

二伸明日ハ臺灣之事評議可仕前外務卿ノ談判始末如何相付ケ宜哉勸考有之度候

彌清康大賀候然ハ岩倉公ニ狼籍之徒于今一人タモ縛ニ不就實ニ慚愧之至之東京警保俱ニ手ぬるく見えさり既ニ機會ヲ失シタレトモ何トカ他ニ着手ニ策無之哉勸考有之度候仍此段申入度如此候也

一月十七日

實美

大隈殿



【備考】右大臣岩倉具視、是月十四日夜退朝の途、赤坂喰違に於て暴徒に傷つけられ、身を以て纒かに免かる、府縣に令して大に搜索すれども未だ得ず、

三八二 南部廣矛書翰「大隈重信宛」 明治七年一月十九日

大隈公閣下

(按査安權助) 廣 矛

謹而奉懇願候過日ハ拜謁被仰付愚意陳述之處御聞取被成下難有仕合奉存候其節暫時差控候様御懇命之處着京以來彼是日數ニ相成殊ニ新任令參事拜命ニ付御用向之儀參上之節御沙汰通廉書ヲ以夫々申送仕候就テハ御用之儀奉伺ハ重疊恐入儀御座候得共兼テ申上候事情御垂憐被成下公ノ御賢慮ヲ以何分之御所置之程只管奉懇願候且又先日奉入御内覽書類可相成ハ御下戻奉願上候恐惶頓首謹言

一月十九日

三八三 島惟精書翰「大隈重信宛」 明治七年一月二十四日

以別紙申上候彌御機嫌能御奉職被遊御坐奉敬賀候隨而當縣管内士族ハ勿論小民ニ至迄人氣居合方至而宜敷頑愚之土俗追々開化ニ向ヒ候方ニ御坐候實地之景況舊臘來正院ハ被遣候小松權大内史及丹羽司法少丞ハ御聞取被下度必御懸念被下間敷候兼而御聞及も被爲在候適當管内之儀ハ海内無比ナル不開化之地ニ御坐候へとも一時風化仕候事ハ迎も出來不申候間治効之着目ハ歐洲ヲ期シ施治之順次ハ先ツ日本並ニ至候處より始メ候積ニ御坐候乍恐 廟堂ニおゐても當縣義ハ北海道同様被思召候様奉願度中々他府縣並ニ容易ニ至兼候間左様御含置被下度奉存候就而ハ舊冬拜謁之砌申上候御巡幸之儀モ何卒御主張御建議被爲在度奉願候近來内務省御創置被爲在寮司も追々被爲置候趣右ハ一定而精選之人材御拔擢相成候事与窃ニ刮目冀望罷在候左も無之候而折角一省之御創立も徒ニ一省之事務ヲ



増し候上ニて乍恐爲天下所不取ニ御座候  
明公御寵遇之厚キニ乗シ不覺例之狂言ヲ發シ候間何卒御聞捨被成下度奉  
願候先之前條奉得御意度如此ニ御坐候恐惶謹言

戊 一月廿四日

(岩手縣權令)

惟 精

大隈公閣下

【備考】司法少丞丹羽賢等は人民撫育のため、六年十一月陸羽地方に出張仰付  
けらる、内務省は六年十一月十日設置せらる、

三八四 南部廣矛書翰「大隈重信宛」明治七年一月二十四日

謹啓小野組一件ニ付廣矛見込別番之通上申仕候郷安藤兩氏如何言上仕哉  
實ハ參殿拜謁之上委曲言上仕度心得罷在候處一兩日所勞引籠不能其儀仍  
之不願恐書取を以申上候御評議之御參考相成候ハ、本懷奉存候恐惶再拜

一月廿四日

南 部 廣 矛 拜

大隈公閣下

三八五 佐野常民書翰「大隈重信宛」明治七年一月二十八日

御内覽

謹啓益御壯健御奉職奉敬賀候ニ拙生義本月十三日より羅馬府滯留依舊  
奉務罷在候條乍憚御降意可被下候陳ハ大使一行御歸朝後追々御改正之御  
都合承知仕逐日隆盛之御政治ニ御進歩之儀之奉遙察候併副島卿其外退任  
右ハ無據御都合ニ由リ候儀ニ可有之候得共實ニ有力者之退職且ハ長官之  
動搖等掛念仕而已ニ御座候追々歸朝之人々御承知可被下博覽會も先  
ハ無滯相濟ニ當今手残り之事務且ニ研究方何レも勉勵罷在候是も可成三  
月迄ニ取切候心組ニ夫々差配致し置候是全ク閣下之御高配以御増



額且六千圓之義も御聞濟相成候故目的通相運現今我民間急需之學術產業多少會得御趣意幾分カハ是非貫徹候様可致ト日夜苦慮罷在候扱當御用向ニ付而ハ御承知通事務官始一統初發カ之勉強殊ニ在澳中之勤筋自他洋行之官員等之振合大ニ致相違候勤勞ニ有之何レ歸朝之上巨細申上義ニハ候得共先歸山高始之身上宜敷御合置被下度尤歸朝之上今般之御盛舉數十萬金御費用相成候功績可成相立候通夫々相纏候心組ニテ諸件手ヲ付罷在候間結尾迄ハ何レも必用之人々ニ有之候間此段も御合置可被下候  
河瀬新公使更ニ第二等特命全權公使ニ被任伊國在留被命航海中之由一體ハ本月廿四日マルセル着港可相成處途中機關相損セーロン島滯船次便ヲ待來月七日着港之由メツサジール會社カ得報知候就來月中旬ニモ交代相濟シ歸澳可仕ト存候同人儀最前ハ伊澳兩國在留御下命之由ニ付双方共交代之心得居候處前文之趣ニ付澳國ハ渡邊書記官<sup>(英志)</sup>カ代理相托都合次第歸朝致し候様御差圖新公使カ御合も相成居候事ト同使カ來着期待仕居候

澳國之方諸件大略四月迄ニハ相纏リ可申ニ付五月中ニハ引拂出來候見渡御坐候就而ハ引拂前御内願仕度一事有之候譯ハ拙生辨理公使ニ而維府罷越候儀甚不都合ニ有之同國在留之各國公使ハ大使五人其他ハ都而全權公使ニ有之辨理公使ハ獨逸小邦之内唯一人暫時相詰居候而已ニテ御國柄右等小邦之公使カも末座ニ相列ル而已カ礼式ニ依リ全權公使カハ引分ケ別席ニ被致候事も有之甚不體裁ニ御座候就而ハ早速其段外務省カ公然申越度候處不肖之拙生素リ其任ニ適セス且ツ嫌疑之筋モ有之ニ付相扣居歸朝ニ相臨去十一月初旬之便ニ而交代之公使ハ全權公使ニテ被差越度申越其後河瀬辨理公使カ被命候旨申來候ニ付又々同様申立置候處行違ヒ今便ニテ同人再命之段承知仕候就而ハ伊國之儀ハ至極都合宜敷候得共澳政府之儀ハ辨理公使之名目相殘シ引拂候而ハ多少交際上不都合ニ相見且拙生カ差急交代被差越候故不首尾ニテ引拂候ト内外人共見認候モ不少様子ナリ勿論不肖之拙生職務上不行届ハ多分可有之尤双邦之交際上并博覽會



ニテ御國譽之揚否等ハ公論も可有之ニ付篤々御聞繕之上自然不都合之次第も無之候半一應河瀬其外同様之拜命被仰付然ル後引拂候得モ澳政府ニ對し至極都合宜敷ト相考申候右ハ唯今之位置ト同等ニも有之旁不顧嫌疑御内願申上儀ニ亦全ク拙生利名之爲ニ無之段ハ幾重ニも御洞察可被下候右閣下ニ御内願仕候ハ拙生身上ニ干係之義ヲ申出自然拙者之素志ト行違ヒ等致し候ハ不本意之次第ト相考呈内書候間其當リ御賢察之上可然ト御同意被下候半モ速ニ御配慮之程奉仰候  
渡邊昇級之義も去十月申越置右ハ定テ過其運相成候義トハ存候得共萬一于今無其儀候半モ是亦御高配奉仰候是以昨春連越之事情も御了知之義ニ付御内願仕候尙委曲ト上野少輔承諾之筋ニ御座候  
明後年米國博覽會之儀定テ過彼政府ハ申立相成候事ト存候右ハ如何之御治定ニ候哉縦ヒ出品之多少ハ何レ共全然御斷ハ交際上難相成筋ニ可有之歟依テ御領諾相成以上ハ昨年之御盛舉ニ比モレハ其費ハ半ニシテ其功ハ

倍し候様且其際ニ乘し御國之產業一際進歩候旁御施設相成度就ハ可成早目ニ御手廻し之方可然ト奉存候拙生歸朝之上ハ廉々愚考申上度ト調子ハ相付置候得共今少し致延引ニ付ハ鹽田(三郡)其外ハ當節之振合等申上候様相合置候間御聞取宜敷御賢考被下度候別冊米政府之布告書ト過御入手之義トハ存候得共爲念差上申候  
御蔭ニ一ケ年滯留諸件少々ハ取調出來候ニ付歸朝之上夫々申上度モ彼是勉強罷在候尤拙生ニも舊年之肝臟閉塞病去秋以來再發漸々脹大當月初ニ到リテハ眼中ハ勿論惣身黃色ヲ發シ歐洲之土ト相成申ト存居候處幸ヒニ治療適當昨今大ニ快方ニ赴キ此分ハ無事歸朝出來可申但此病症ニハ獨逸カールスバツト宅申處之湯治世界第一ノ相應スル方法ノ由ニ付都合次第右療養ヲ加ヘ歸朝仕度心得ニ御坐候間此段御含置可被下候先以各件々御内々申進度敬具

一月廿八日



(辦理公使、萬國博覽會副總裁)  
佐野常民

大隈參議閣下

尙以御内政様の可然御鶴聲奉願候已上

三八六 大久保利通書翰〔大隈重信宛〕 明治七年二月四日

今朝參上之御約束申上置候得共佐賀縣云々之事ニ付今朝之内西郷〔從進〕の内談  
之由有之且岩村〔高俊〕赴任之事を促りし置今日十字正院にて面會之約束いとし  
差懸不得止ニ付御斷申上候一件を正院にて御談申上候亦も相濟可申候此  
旨艸々頓首

二月四日

利通

重信様

【備考】三日佐賀の變報東京に至る、是日利通、西郷從道と會して、鎮撫の方法を

協議し、高俊の赴任を促す、同日利通の日記に曰く「今朝西郷子入來、佐賀  
士族暴動ニ付鎮臺兵云々ノヲ談ス、同車正院參朝、岩村佐賀縣令御  
委任云々、陸軍省に御達相運ハセ候とあるもの併せ見るべし、

三八七 吉田清成書翰〔大隈重信宛〕 明治七年二月五日

拜啓陳ハ昨夕吉田少丞〔二郎〕ヲ以粗申上候通ヒール氏とも篤と相談ニ及ひ候處  
到底蔑視寛見ヲ良トスとの論あれ共夫ニあつて此度之事ハ難相濟充分手ヲ  
盡し是非ライベルと云事ニ迄糺シ付夫々適當之罪ヲあてされハ政府之名  
信も難相立と申述候處一々尤之事として併しレタラクシヨ〔打消しチ新聞紙  
屋よて爲スチ云  
ナ〕り茂充分ニ爲致候得ハ此上も有之ましく若し萬一も彼レ此方ノ意ニ任せ  
を右レタラクシヨ〔ナ〕り茂爲さる時はライベルヲ證據立てる時ニ到り一層  
此方ニ強ミヲ歸し可申何を初發之所分ハ右ニ過きまとの事よて手紙之草  
案ヲ立て吳候得共文體等漸々寛ニ過き候様被存候間尙今朝再談いし候



心組ニ御座候

外務卿之見込之如何ニ候哉何分も今度之事を政府よて腹ヲ据へ御所分(幸島宗則)被下候事確定せされバ拙者一人之力よてハ充分ニ其意ヲ難得存せらる候間一昨日も篤と御示談仕置候通ニ御決定被下置候様相願候尤吉田少丞へも相托し置候間同人よて御見込ノ程も尙委細申遣吳候歟又ハ本多なりとも出港せし免候歟と奉存候間夫までと決局之所分ハ相扣へ居可申と存候伊藤(博文)參議も參り居同人とも多少及相談候處同人義も今度ハ疾ヤ好機會なるべしシツカリ所分致候方可然との論ニ御座候  
右荒々得貴意候頓首

二月五日

吉田大藏少輔

大隈參議殿

三八八 臺灣蕃地處分要略

明治七年二月六日

第一條 臺灣土蕃ノ部落ハ清國政府政權逮ハサルノ地ニシテ其證ハ從來清國刊行ノ書籍ニモ著シク殊ニ昨年前參議副島種臣使清ノ節彼ノ朝官吏ノ答ニモ判然タレハ無主ノ地ト見做スヘキノ道理備レリ就テハ我藩屬タル琉球人民ノ殺害セラレシヲ報復スヘキハ日本帝國政府ノ義務ニシテ討蕃ノ公理モ茲ニ大基ヲ得ヘシ然シテ處分ニ至テハ著實ニ討蕃撫民ノ役ヲ遂クルヲ主トシ要件ニ付テ清國ヨリ一二ノ議論生シ來ルヲ客トスヘシ

第二條 北京ニ公使ヲ派シ公使館ヲ備へ交際ヲ辨知セシムヘシ清官若シ琉球ノ屬否ヲ問ハ、即チ昨年出使ノ口蹟ニ照準シ琉球ハ古來我カ帝國ノ所屬タルヲ言ヒ並へ現今彌々恩波ニ浴セシムルノ實ヲ明ニスヘシ  
第三條 清官若シ琉球ノ自國ニ遣使獻貢スルノ故ヲ以テ兩屬ノ說ヲ發セハ更ニ願テ關係セス其議ニ應セサルヲ佳トス如何トナレハ琉球ヲ控御



スルノ實權皆我カ帝國ニ在テ且遣使獻貢ノ非禮ヲ止メシムルハ追テ臺灣處分ノ後ニ目的アレハ空ク清國政府ト辯論スルハ不可トス

第四條 清政府ヨリ臺灣處分ニ付論說ヲ來サハ昨年ノ議ヲ確守シ判然蕃地ニ政權不逮ノ證據ヲ集テ動カサルヘシ若シ土地連境ノ故ニ付論スヘキ者生セハ和好ヲ以テ辯スヘシ其事件至難ニ涉ラハ是ヲ本邦政府ニ質シテ可ナラン惟推託シテ時日遷延ノ間ニ即事ヲ成シ和ヲ失ハサルノ機謀交際ノ一術ナリ

第五條 土蕃ノ地ハ無主ノ域ト見做ト雖清國版圖ト犬牙接連ノ地勢ナレハ隣境ノ關係生シ葛藤ヲ發スヘケレハ福建省ニ屬スル臺灣港ニ領事一員ヲ置キ淡水事務ヲ兼轄セシメ征蕃ノ時ニ方リテ船艦往來ニ付テノ諸用ヲ辨セシムヘシ右職掌ノ外ニ臺灣處分ニ付清國地方官トノ應接ヲ擔當セシメ極々和好ヲ保護スルノ長策トスヘシ但清國視察シタル某ヲ領事ニ任スヘシ

第六條 領事ハ蕃地ノ征撫ニ關セス征撫ニ任スル者ハ應接ニ關セス蓋シ其分界ヲ明カニシ和好ヲ維持セン爲メナリ若シ事至重ニ涉ラハ是ヲ北京在勤公使ニ傳致スルヲ可トス

第七條 福州ハ福建省ノ一大港ナレトモ臺灣處分ノ便路ハ臺灣及ヒ淡水ヲ要地トス且福州ニハ琉球館アレハ暫ク是ヲ度外ニ置キ嫌忌ヲ避クルヲ佳トスヘシ

第八條 某等六名ヲ先ニ臺灣へ發遣シ熟蕃ノ地へ立入り地形勢ヲ探偵シ且土人ヲ懷柔綏撫セシメ他日生蕃ヲ處分スル時ノ諸事ニ便ナラシムヘシ

第九條 探偵ノ心得ハ熟蕃ノ地琅瑤社寮ノ港ヨリ兵ヲ上陸セシムル積ニ付兼テ此邊ノ地勢其他停泊上陸等ノ便利ナル事ニ注意スヘシ

二月

大隈重信



大久保利通

【備考】當時征臺の議廟堂に起り、是年正月大久保利通と共に重信を調査委員として蕃地問題を調査せしむ、かくて重信と大久保の熟議になりしものこの要略なり、または是日の閣議に於て遂に討蕃撫民の師を發すべきことに決定したり、而して重信等は蕃地處分の調査と共に朝鮮問題に對する調査をも命ぜられ、この要略と前後して提出せるもの次の取調書なり、

三八九 朝鮮遣使に關する取調書

明治七年二月

朝鮮へ數名ヲ發遣スルノ旨趣

一 朝鮮遣使ノ事既ニ廟議一決セリ因テ茲ニ其目的ヲ達シ其序ヲ追シカ爲數名ヲ撰ヒ渡航セシムヘシ  
(附箋)  
 御一新以來朝鮮ニ使ヲ遣ハサレシハ既ニ數回彼屢之ヲ拒ム國辱ト云フ可シ今又使ヲ遣シ公誼ヲ表シ誠ヲ盡スト雖モ彼尙ホ肯ンセサルト

キハ問罪ノ師ヲ興サ、ル可カラス因テ預メ之カ計畫ヲ爲シ置カサル可カラス

一 友國ノ公誼ヲ表シ舊交ノ誠意ヲ盡スハ遣使ノ旨趣タルニヨリ其目的ヲ失フ可カラス

一 其國情ノ如何兵備ノ虛實版圖ノ形勢等ヲ搜偵シ後圖ノ考覈ニ充ツヘキナリ  
(附箋)

朝鮮境ヲ魯西亞ニ接ス魯國ノ情狀測ル可カラス宜シク人ヲ遣シ其國境ニ入り探偵セシム可シ支那亦是ノ如クス可シ且朝鮮ニ兵ヲ出スノ議決スル時ハ預メ魯國ニ照會シ關係スル事ナキノ談判アル可シ  
 一 艸梁館ハ即我國權ヲ行ヒ來リシ一局ノ地ヲ占守シ官民ヲ保護シ商路ヲ開設スルニアリ  
 右ノ目的ヲ要スル時ハ

一 今茲ニ發スル處ノ數名ハ使節ノ名義ヲ用ヒス壬辰亂後ノ例ニ習ヒ即舊



時不可棄舊情不可破ノ旨ヲ失ハス前條ノ意味貫徹スルヲ期トスヘシ  
一 一行渡韓ハ必ス和船ヲ以テ航行スヘシ  
一 官員隨行ハ可成少數ヲ好トス三五名ヲ過クヘカラス  
一 着手ノ上我意ニ應スルモノアラハ迅速人ヲシテ回奏セシムヘシ

二月

大隈重信

大久保利通

三九〇 山根秀介上申書「大隈重信宛」 明治七年二月七日

肅啓佐賀縣貫屬嘯聚之趣ハ連々縣令立木兼善迄申通し置候ニ付毎度開申  
仕候事と奉存候陳別封森長義(佐賀縣參事)ハ送進候様頼來實ハ數回封書も差出候哉之  
處決ニ接着不仕儀と相考候由中途ニ被奪候儀と相考絶ニ往復出來不申由  
右之次第ニ事事實不得上陳進退究迫之形勢ニ被察候此段不取敢上申仕候

也

明治七年二月七日

福岡縣權參事山根秀介印

大藏卿大隈重信殿

追而過ル五日夜森佐賀縣參事刺客襲來之内報ヲ得同夜馬關ニ發向之  
由此段申添候也

【別紙】

過日來征韓論沸騰致候事ハ兼而御報告申上候通候處其後所々打寄評  
議等御坐候而追々其黨相増し今ハ二千ニ充候而縣官ニ於て迎も手之  
下し方無之委細之儀モ口上ニ無之而難盡情實候條近々出府仕候此  
段宜御聞取可被下候也

明治七年一月廿八日

佐賀縣參事森 長義印



大藏卿大隈重信殿

三九一 三條實美書翰〔大隈重信宛〕 明治七年二月八日

彌清康大賀候然ニ大久保肥前出張ニ義木戸ニも談候ニ末同人留主中ハ木戸ニも乍所勞精々相勤可申趣ニ付岩倉申談大久保出張ニ事一決致候間此段申入候猶明朝萬々可申談候得共不取敢此旨内々申陳候也

二月八日

實美

大隈殿

三九二 山縣有朋書翰〔大隈重信宛〕 明治七年二月十日

御奉職奉欣然候扱省内條令并改革表ともさし出申候御落握可被下候至急御運ヒ被下度渴望罷在候今日參朝ニ心算ニ候處近衛解隊等にて不得止書

簡を以申陳候書外一兩日中期拜鳳候頓首

二月十日

〔近衛都督〕  
山縣 狂介

大隈殿

〔備考〕 有朋、二月八日陸軍卿を免じ、近衛都督を命ぜらる、

三九三 松村辰昌書翰〔大隈重信宛〕 明治七年二月十日

〔房之〕宮川長崎縣令頃日風聞不宜趣諸省ニ有之由ニ付近々同人交代共ニハ無之哉巷説紛々有之併し同人入縣爾來外國人ニ接し候事件ニ於テモ不體裁ヲ釀し候儀も無之外ニ縣令ニ職掌ヲ失し候義も有之間敷存候同縣昨春已來長次官ニ際少々異論有之候處兵頭參事入縣横山兼務御免已後漸ク折合も宜敷事務相運候際ニ到り今又他ハ長官入交ヘニ相成候ハ是又長次官議論異り候哉も難計左候得バ第一事務不舉ノミナラス其已下ニ官員殊之外



苦配<sup>ひ</sup>多し終ニ上下官民之爲ニ不相成依テ格別不都合之義も無之候ハ、  
従前之儘御据被置候方可然僕在職中實地之景況見聞之儘言上仕候總<sup>る</sup>地  
方官ハ時々交代無之方至極ニ奉存候此儀長崎縣而已ニアラス此段御舍迄  
御内々申上候謹言

明治七年二月十日

辰 昌拜

大隈 公閣 下

三九四 大木喬任書翰「大隈重信宛」 明治七年二月十三日

佐嘉人歸縣之ものハ内務卿着之比<sup>(大久保利通)</sup>までハ御さし留メ有之方ト存候右は過  
日も申上置候通り之次第ニ色々懸念致候ニ付猶内務卿ト御相談被下度  
存候一寸爲可得貴意早々

二月十三日

(參議兼司法卿)  
大 木

大隈 様

今日も船便有之よしニ付一寸申上候

三九五 岩倉具視書翰「大隈重信宛」 明治七年二月十三日

昨日便船ニ<sup>る</sup>二十名或ハ四十名とも云フ右ハ貴卿ヲ刺スノ旨趣ト聞ク肥  
前一體と同論ト言フ是等ハ元々御承知決<sup>る</sup>無御助才ト存候へ共懸念不  
少一筆申入候江東<sup>(江藤新平)</sup>今日ニ<sup>る</sup>ハ必死之地ニ陥り策略百方施し候事と押計り  
申候ニ付厚ク御注意可被成候早々以上

二月十三日

具 視

大隈 三木 殿

【備考】佐賀の亂には重信は大に同郷人に疾視されたる如し、重信後年當時を



回想して曰く、日本は徳川氏を倒した後、何事もなく一大革新を斷行して封建制度を郡縣制度に改めたといふけれども、其の實封建を潰す時の各藩の人心は甚だ恟々たるものであつた、佐賀藩でも我が輩の如きは、最も憂國黨から憎まれたものであつた、憂國黨といふのは島津久光の黨で、飽くまで封建の遺制を墨守せんと欲して大勢に反抗したものだ、かくて佐賀では七年に憂國黨の亂があつて、保守派が江藤を擁して起つた、彼等の一味は、我が輩の首を斬らうとまで騒いだ、七年を待たないで、閑叟公の薨去前にも彼等の煽動で、百姓一揆の有つた程だ、我が輩は折角これまで築き上げた王政維新の大業を妨げる様な言動を示すに於ては、敢て容赦しないと猛然として果斷の處置を執つた、田村昌宗等も我が輩の意見を道理として、愚圖々々言ふ奴は片ツ端から縛り上げると敦圀いた、そんなために一部の激昂を買つたと、この書また當時の狀を語るものなり、

三九六 伊達宗興書翰「大隈重信等宛」 明治七年二月十三日

九州邊初中國邊も人氣動靜之儀紛々風説有之趣ニ亦已ニ近縣ヨリ當管下

之儀も内々聞合セも有之程之事ニ付御地ニ於るも種々流言等可仕歟と遙察仕候就亦即今之景況當管下ハ勿論近傍縣ニも至る靜謐ニ聊異條も無之趣尤佐賀之儀ニ聊異條有之儀確説之趣ニ相聞候當縣之儀鎮臺兵營(五日)失火ニ付亦ハ尙更流説有之歟と推考仕候此後萬一異條有之候ハ速ニ可申上候得とも即今靜定之實景御安心之爲上陳仕候恐惶謹言

二月十三日

廣島縣權令伊達宗興

大久保内務卿殿

大隈大藏卿殿

閣下

三九七 大久保利通書翰「大隈重信等宛」 明治七年二月十七日

立木福岡縣令義頃日來病氣之趣申立其實爲差病症ニモ無之時勢見合セ事



ヲ病ニ托シ赴任不致ヨシニ相聞ヘ此際ニ當リ右様未練之了簡以之外ナル事ニ存候尙貴地ニおゐて搜索之上相違無之候ハ、今日之場合右等腐魂ノ惰夫一縣ノ重任ヲ爲負置候ハ不都合ト被存候間速ニ免職相成可然ト存候此段申進候也

二月十七日

大久保内務卿

大臣

参議

御中

追テ松方租税頭ヨリ承リ込候事情モ有之ニ付尙同人ヨリ御聞取有之度存候也

【備考】

是の日、大久保利通佐賀出張の途、大阪にあり、この書大阪より發す、利通立木の行動を聞き憤慨して、この書を重信に寄せしなり、是年九月八日、立木を罷めて渡邊清を以て代へしは蓋しこのためなり、

三九八 岩倉具視書翰「大隈重信宛」明治七年二月二十七日

備前岡山縣士族佐賀同様企アリ至急御面談申度早々御出可被下候以上  
二 廿七

具 視

大隈 殿

【備考】

岡山縣暴徒蜂起の風聞東京に達し、廟堂大に驚く、其の狀は三月八日岩橋轍輔の書に詳かなり、

三九九 岩倉具視書翰「大隈重信宛」明治七年二月二十七日

黒多入來備一件申入候所當節之事速ニ實否相分り候事專務故伊藤御談し隣縣に傳信御打候ハ、凡ノ事早く可相分との心添ニ候何卒貴卿御賢考可給候様依頼候



佐賀云々ノ事ハ明日大木ニ得<sup>(倉住)</sup>と御聞可然存候右早々如此候也

二月廿七

大隈 殿

具 視

四〇〇 岩倉具視書翰「大隈重信宛」 明治七年二月二十八日

今朝九時參勤之事條公ヨリ被命候定<sup>備前</sup>一件と存候右ハ昨夕各位御相談其上更ニ黒多<sup>(清隆)</sup>ニも申含即刻西郷<sup>(從道)</sup>へも示談之筈ニ候此上モ別ニ所存申上候筋も無之少々不快ニ付無據不參仕候條御含可給候十分無御手拔御盡力可給候一黒多申居候ニハ大久保ヨリ來狀朝鮮臺灣等之事是非前議之通リ御運ヒ相成度ト申越候其文中ニ萬事貴卿承知故尙厚談し候様との由ニ候定<sup>備前</sup>黒多ヨリ可申入と存候得共一筆申入候此外魯使節之事も速ニ御發し可然存候何も條公<sup>の</sup>御打合等閑不成様ひとへニ御配慮可被下候

但し他ハ宜敷候得とも肥前之模様既ニ全國暴舉ノ次第備前云々もアリ又白川縣も少々モヤノノ由ニ付臺灣兵ヲ出スノ事ハ此形勢時機ニ<sup>あ</sup>ハ可用心事と存候  
右一筆申入度如此候也

二月廿八

大隈 殿

具 視

四〇一 黒田清隆書翰「大隈重信宛」 明治七年二月二十八日

前文略ス

儲テハ備前岡山云々者確報御坐候哉昨夜岩公ヨリ承野生愚存ニ者早速其隣縣<sup>の</sup>電信御打可被成旨御當人申上置候末々何ニの風情も不承取敢ヘス御尋子申上候此旨早々頓首



二月廿八日

(開拓使次官)

田拜

大隈大兄閣下

【參考】

岩橋轍輔書翰「熊谷武五郎宛」 明治七年三月八日

岡山縣事情之儀遂探索候處別紙杉山岩三郎願書を以頑固士族ヲ誘導致シ且前參議ト兩派別立スルヲ憤リ朝政ヲ誹議シ石部參事(誠也)ヲ輕侮シ意氣揚々トノ壯男健兒ヲ雷同セシムルヲ甚シ郊外ニ在ル巨大之別莊體ノ家ニ於テ岩三郎私塾ヲ開キ備後人森田月頼ト申陽明學者ヲ教師ニ雇ヒ生徒數十人ヲ養ヘリ岩三郎兄同縣中屬中川横太郎内外應援屢々來往密談アリ去月廿日之張紙ニ云 鎮西之報知有之付一同榎之馬場ニ集會スベシ報國隊ト署シ有之由岩三郎此事關係無之与自ラ申居候由其實如何歟

右之段卿輔(大隈吉田)の御申立置被下度候也

七年三月八日

熊谷大丞殿

岩橋少丞印

四〇二 岩倉具定書翰

「大隈重信宛」(嘉彰親王) 明治七年三月朔日

唯今ハ參殿毎々御面倒恐入候扱征討宮出發ニ付世上人心も不穩次第百里外地方之處實ニ心配可致ニ付各地方出張之者夫々情實巨細御申通し有之度且昨今佐賀形勢能ク各地方に相通し候様致度此義唯今參上之節可申入被申附候處小子失念致候ニ付以一紙申上候全ク不都合之段御含ミ置被下度候早々以上

三月一日

具定



大隈重信公

四〇三 岩倉具視書翰「天隈重信宛」明治七年三月朔日

今朝ハ御苦勞ニ存候其節申入候件々更ニ左ニ申入候

一 征討總督宮ヲ被置候上ハ諸事軍國之御政勿論ニ付ハ西郷日々正院出

仕云々御沙汰之義貴卿御退散後黒田來リ右ハ不可然則三條公兵部事務

御擔當殊更ニ名分ナリ事實ナリ可然と申居候ニ付同意致し早速 皇居

出頭貴卿ニ御談し可申申入置候但シ右ハ西郷大輔進退ニ付何カ子細有之不得已次第ト推察被致候 尙厚ク御

勘辨條公ニ御申上可給候

一 當府下ハ勿論各地方官エ佐賀戰爭始末更ニ貫徹不致ヨリ煽動客虛ニ乘

し種々奸計ヲ施し候義ニ付何卒情實廣ク聞知候様只管御心配御相談有

之候様三條公ニ御申入可被成下候但シ先尅御話申入候通り大久保留守宅虚談ノ如キ段々承候

一 諸縣掛念ノ筋有之候向ハ其舊藩士族在官或ハ家令家扶寄留之中人撰條

公ヨリ云々御内諭之義ニ可然ト存候最各御手當ハ可被下事と存候

一 彈藥取締方之義陸軍省ニ對し申モ如何ニ候得共昨日御承知之通り吉田(清成、大藏)

内話(少輔)も有之密商之義誠ニ可恐事と存候何レ之士族蜂起候とも當世銃戰

之外無之ニ付此一筋十分御取締相附候ハ、決して暴動ハ不可成得事と

存候此義陸軍内務等にて十分之御着手有之度存候

一 福岡御登用之事昨日條公御内話御尤ニ存候至極御同意申上候間速ニ御

取計之様御申上可給候

一 高知表之義ニ付條公内諭も有之候處今朝來佐々木入來段々内談之筋有

之少々金モ入り候得共即今御心配之義ハ有之間敷存候

一 今朝申入候通り何事先木戸氏ニ能々御打合之上御取計之様偏ニ願存候

彼卿不容易憤發誠ニ御大事之處ト存候

一 陸軍省之義御發表ニ付ハ前以テ西郷大輔ニ能々御打合セ無之ハ不

相濟事と存候



一唯今承候處豊岡縣下士族動搖ハ全ク縣廳ヨリ家祿奉還之義ニ付

歸農 歸商 徒食

右三條ニ分チ見込ヲ立テ可申出との布告ヨリ混雜ヲ生シ候哉ニ候尤眞  
偽不相分候得共徒食云々頗ル不都合ト存候此外ニも家祿奉還之義ニ付  
地方官御趣意ヲ取違エ心配致候ヨリ彼是物議不少趣是又眞偽承知不致  
候得共厚ク御注意被下度候

一唯今蓮池本軍電報恐悅此事ニ存候

右條々今朝御苦勞之末尙又掛念ニ付貴卿迄一筆申入候決此一書他見御  
無用條公丈ケエ御申入可給候早々以上

三月一日

具 視

大隈重信殿

【備考】三月一日、佐賀賊徒悉く敗走し、官軍佐賀城に入る。

四〇四 金井之恭書翰「大隈重信宛」 明治七年三月朔日

別紙電報ハ極秘ニ付他ニ傳播無之様御注意被成度旨右大臣殿々々も  
被仰聞候尤御同人より委細明朝御談し可申上旨ニ御座候參議方御三人ハ  
而已御廻し申上候條御含被下度候也

三月一日夜

金井少書記官

大隈公閣下

四〇五 三條實美書翰「岩倉具視宛」 明治七年三月二日

略札高恕

陸軍大輔當分日々九字ハ十一字迄正院ニ出仕候事(從進)西郷へ内々申入候處尤  
御用之節ハ何時ニも出頭仕候間日々出仕候事ハ彼是辞居申候併右ハ參議

大隈重信關係文書第二 (明治七年三月)



兼勤杯之譯とも違ひ御用便之爲氣脈之相通候様之爲ニ付是非出仕可有之  
申聞候同人申候ニ何卒津田<sup>(出)</sup>を大輔ニ被任同人ヲ正院ニ出候様被仰付度頻  
ニ申居候仍此段申上候黒田<sup>(道雄)</sup>へハ大輔日々正院ニ出候事ハ別ニ不申入とも  
宜哉猶宜希入候也

三月二日

實美

岩公

【備考】

時に西郷從道陸軍大輔なれど、正院出仕を喜ばず、仍りて是月三十一日  
津田出陸軍大輔兼任、四月五日陸軍卿代理を命ぜられ、正院に出仕す、

四〇六 渡邊清書翰〔大隈重信宛〕 明治七年三月八日

益御勇健奉恐悅候叔佐賀縣平定之義ハ既ニ御承知之事と奉存候故更ニ不  
申上候私事去ル三日長崎出發四日佐賀表ニ罷越候然處白川縣貫屬客月十

七八日比議論沸騰一時危キ場合ニ立至リ〔大久保利通〕内務卿も頗ル懸念之折柄脱賊多  
クハ同縣管内ニ潜匿之聞へも有之旁以同縣へ出張被申付一昨六日白川着  
縣候處捕亡も二百人余増加四方ニ配置官員并戸長等非常盡力之趣ニ候得  
其實効未タ不相揚依<sup>テ</sup>熟考仕候處最前貫屬動搖之餘習未タ皆脱不仕或ハ  
危懼ヲ抱キ或ハ疑念ヲ醸シ或ハ縣廳着手之緩急ヲ伺ヒ候様相見實ニ不可  
失之機會ニ御坐候間今八日攘夷學校兩派巨魁數名呼出縣令同席緩急抑揚  
或ハ威シ或ハ悟シ方向相叩キ候處始メテ膽心ヲ吐露シ一同力ヲ極メ搜索  
捕獲シテ以テ今日之御嫌疑相晴候様必ス實効ヲ顯ス<sup>ル</sup>と一同躍立候依  
<sup>テ</sup>夫々方向相授ケ置明日ハ米田横井之兩派ヲ集メ是又一般ニ打込盡力爲  
仕候積リニ御坐候實ニ轉禍爲福之好機會爲國家大悅之至ニ不堪御安心可  
被下候書餘後便可申上候謹言

三月八日

清〔大隈大丞〕



大隈 卿 公

吉田 少 輔 公

【備考】

清六年十一月十四日政府撫民の趣意を地方民に貫徹せしむべき命を受け、畿内中國に出張を仰付けらる。是年佐賀の亂起るに及び、長崎より佐賀に至り、更に白川縣に至る。この書白川縣鎮撫の状を報するものなり。

四〇七 岩倉具視書翰「大隈重信宛」 明治七年三月十日

小野組之事政府評決相成候間明後十二日明日休息陸海兩省外二省河村大山 杉本戸此

外省ハ何レも等招一應心得迄ニ一見爲致候上御達し可相成候嶋田も同時御

達し可相成と存候此段一筆申入候也

三月十日

具 視

大隈 參 議 殿

四〇八 山口尙芳書翰「大隈重信宛」 明治七年三月二十一日

陽春ハ不待櫻桃之期隔居愁春二三周素是古今之習常不足怪ムニト雖又歎

無キヨ在ス頃聞閣下之遠信無恙ヲ僕も又天運未タ不盡哉平ニ各所ニ奔趨

勞苦ハ人生之義務更ニ疑所無曾而甘スル所与雖或ハ誠意ニ反戻スル所無

キヨシも在ス御了察奉別之期ニ當リ盟定之義も有之旦夕ニ忘却不仕鑑名鑑名

候得共時運然ラシムルカ時機ヲ待ニ他無當節ハ速ニ歸東之覺悟ニ候

僕等ハ長崎口よリ進撃瞬下ニ入城續而東口官軍着陣西口之兵ハ監軍と新

募兵三日滯留直ニ引上ケ僕ニも同様出崎候處又々佐嘉出張之旨内務卿よ

り申來テ十壹日佐嘉着爾今相滯リ居候當縣下之形狀ハ公書其他往來之人

ニ御承知細述ヲ不要候實ニ城下之衰耗不可言此節岡本歸京ニ付御聞取

リ被下度此難後未タ一般協和之姿無之到底固塞慨歎ニ至リニ候併病毒

速破鎮西之頑も意外ニ落膽畏縮之形勢先ツ邦家之幸奉欣祝候僕之舊邑も



崎着迄之處も苦慮候處意表之勢ニ而安心偏ニ恨ラクハ征韓之徒江藤始メ  
逃走其ノ所ヲ不得遺憾薩土之間与も愚察候得共或ハ轉シテ中國ニ出候哉  
も難計此ノ恐毒早ク縛セスンバ后患又思慮セサルヲ得ス未タ海外ニハ渡  
航不致義ハ必然ニ候猶 廟堂よりも御鑿索相成度奉希望候いつを當月末  
迄ニハ歸京与奉存候間乍其上萬々岩倉ニも時々參伺ノ事と存シ奉リ候其  
砌ハ委細之情實御鳳聲被成下度奉希候爾後一封ヲ不出不平与存候可然御  
傳給リ度此段任幸便ニ勿々頓首百拜

三月廿一日

猶々御同列各位ニも御序ニ可然よろしく願上候以上

山口(外務) 少輔

大隈參議殿

【備考】尙芳、佐賀の亂起るに及び二月十二日長崎に出張を命ぜらる、

四〇九 三條實美書翰〔大隈重信宛〕 明治七年三月二十三日

昨日岩倉(從道、陸軍大輔)申入候西郷内望臺灣之事御許容無之方ニ申入候得共猶亦同人  
方申出候次第も有之今一應熟議之上決答可仕候間左様御承知有之度候也

三月廿三日

實美

大隈殿

四一〇 關義臣書翰〔大隈重信宛〕 明治七年三月二十五日

再拜頓首言時下暖和先以  
閣下無御寸障御盛ニ御奉職殊ニ客冬後百端混雜依舊速ニ御判理之由爲邦  
家恐悅此事奉存候儲義臣昨八月入縣後乍不及必至盡力縣内從來之體裁  
辛未壬申租稅御勘定ヲ初大小百事修理近ク稍整了初テ普通新縣之體裁ニ  
相成候即今尙調方不行届殘ル處ハ寺社境内外上地區別官林ノ反別木數調、



元大臣九十六人ノ下屋敷處分、二三丸ノ地所年限處分濟ノ反別金高其餘郷藏敷地等ノ事右ヲ除ク之外全ク改正相濟隨テ當今縣内無異平穩乍恐御高枕可被下候然ハ昨七月義臣赴任前閣下へ親ク御依頼申上候所謂當縣事務曾テ不舉義臣入縣初着手之事ニ付テハ世ニ聞ヘシ米澤人情之狡黠而テ前官輩等官省要路中ニ散在極テ讒言等將來可相生果テ然ル時ハ事ノ原由信否詳細實際ヲ御糺明之上御處分之儀ハ至當之筋ニ付閣下及ヒ陸奧氏へ再三再四言上仕置候段ハ閣下モ現ニ御承知之事ニ有之然ルニ近比傳聞ス昨冬來義臣ノ儀ニ付前官并免職ノ輩左院在勤宮島某又ハ舊知事又ハ東京寄留元參事芹澤元權參事前島其他舊屬官ノ者トイふ夫々何歟故障モアリシコト歟其筋へ切リニ讒言構藁セリト蓋シ内務省ヲ置カレ人民ヲ保護シ民心ヲ收合スルハ第一ニアルトイふ且ハ佐賀縣動搖ニ付地方撫按第一ニアルト云之機ニ投シ隙ニ乘シタルト知ル既ニ政府之御聽ニモ入リシナド、承ル正大高明之 大政府右等小人狡者ノ讒奸ニ辯明セズ妄リニ御信向ハ百其理無之筈況ヤ從來知遇ヲ受ル閣下ニアリ殊ニ赴任前卑

見モ申上置候末之儀ニ有之候得モ尤義臣安心常務ニ勉勵罷在候乍然陸奧氏ハ既ニ退職而テ閣下ノ如キハ或ハ地位高ク加ルニ大政上繁劇萬々一瑣末ノ事誤テ御聞込等アルモ難計ニ付先寸書一應心情言上仕候夫レ小人ノ事ヲ爲スヤ周智狡密而テ構造至ラザルナシ所謂萋斐貝錦ヲ織成シ巧舌眞ニ簧ノ如ク曾參ノ至孝ナルモ之ヲ惑スモノ三人ナレハ賢母モ杼ヲ投スル道理千里ヲ照スノ明アルモ咫尺ノ蔽ヲ破ル能ワズ或ハ正院中迷溺ノ人ナキトモ期シ難シ伏テ希フ前述ノ如ク義臣ニ於テ獨リ閣下ノ明ニ依着安心ス閣下ノ於義臣一點ノ疑念ヲ不抱ト雖萬一眞ニ讒アルニ於テハ閣下其原由及ヒ義臣ヲ糺彈シ義臣ヲ使テ冤ナカラシメンコトヲ將又猶言フ所アリ義臣爲人伉直百事不能雖然少年好テ書ヲ讀ム先哲ニ習テ自ラ欺カザル所ノモノアリ心ヲ執ル正大實直事ヲ處ル勉不惰ノ儀ハ敢テ他ニ讓ラズ義臣ノ職ヲ奉スルヤ前ニ二年今又四年只百里外ニアリ其事蹟未タ官省ノ親ク知ル所ニ非ズ但愛ヲ閣下ニ失ワザルヨリ今日アル所以ナリ冀



クハ 閣下ノ明斷ヲ以義臣ヲ 輦轂ノ下該省ノ中ニ轉任セシメンコトヲ然  
 レハ義臣他ニ顧念ナク其務ル所主一ニシテ益々精力ヲ盡スヲ得ン而テ  
 閣下ノ下風ニアリ親ク其言ヲ承ケ其事ニ就キ義臣今日ノ職上ニ比スルニ  
 其功百倍而テ獨リ義臣ノ幸福而已ニ止マラズ 閣下耳目肢體ノ一任ニ充  
 ル亦邦家百分ノ裨補ナキニモ非ルベシ況ヤ 閣下ノ朝夕觸目スル處假令  
 老狡巨黠ノ小人アルモ其術ヲ施スナク而テ畢竟義臣一人ノ冤ヲ晴ス而已  
 ナラズ政府其レ人ヲ誤ラザルノ美アリ伏請 閣下速ニ決議アラシムコトヲ昨  
 年赴任前元租稅頭(陸奥宗光)ノ言ニ米澤改正ノ後ハ是非該省ニ用ント云頭ハ既ニ免  
 職ス義臣前約ヲ誤ラザルコトヲ欲スルモ其縁ナシ 閣下能ク之ヲ推憐シ玉  
 フヲ祈ル若シ至急轉任ノ儀モ難相成御都合モ候ハ、即今 閣下ノ膝前ニ  
 於テ當縣昨年來ノ改正順序實際情實ヲ飽迄吐露言上シ腸内ヲ盡サント欲  
 ス偏願ス速ニ上京ノ命アラシムコトヲ不堪懇願ノ至謹俟進止筆不盡言餘緒省  
 焉再拜頓首泣血白

明治七年三月廿五日夜

置賜縣權令

關 義 臣 印

大隈大藏卿殿閣下執事

四一 三條實美書翰「大隈重信宛」 明治七年三月二十六日

(稱之助) 高嶋侍從歸府大久保内務卿ハ申越候義ニ付評議有之候間明朝九字參朝可  
 有之候也

三月廿六日

實 美

大隈參議殿

【備考】是より先三條岩倉二公は書を大久保に贈り、賊徒處分の大體を定め、速  
 かに歸京せんことを促す、然るに大久保は佐賀既に平定に歸せしと雖



も、未だ首領たる江藤の捕縛に至らざるを以て、暫らく猶豫を請ひ、是月十九日高島の歸京に託し、二公に書を贈る、同日又賊徒審問のため臨時裁判所を佐賀に設置するに就て、詳細を報じて其の裁制を求めたり、この書中にある「大久保内務卿より申越候義」とは多分この二件ならん、

四一二 田村昌宗書翰「大隈重信宛」明治七年三月二十七日

佐賀暴舉來百端御配心嘸哉ニ候處速ニ致平定少キ御安慮可然哉与奉遙察候阪地ヲ發シ博多へ着ニ處福岡縣貫族諸所ヨリ屯集征討ニ付亦今般申立甚タ承服ナラザル體ヲ見テ隣縣ニ景況亦如茲アラント知レリ依テ速ニ軍議ヲ整ハ迅速繰出シ一戰勝利ヲ得ルヤ否人氣稍一變終ニ佐賀へ向フコトナレリ熊本も既ニ暴發近キニ在ントスル頃ヒ一戰ノ下賊敗走セリト聞ヤ否人心忽チ變換スト柳川久留米モ前山隊ヲ拒ミ賊へ兵糧ヲ送ルノ勢大概合一ノ形勢ナリ若シ官軍發向兩三日ヲ延サバ九島固結不可解ニ勢是ヲ討容易ナラス或ハ大形勢ニ關スルも亦難計抑官軍發向ハ二月十九日ト

内決有之居候處同月十七日熊鎮兵籠城ニ云々電報ニ付俄ニ同日ハ出發ニ事ニナレリ此ノ兩日引揚ケルト引延ストノ間豈天下ノ大事ナラズヤ電機ニ大有益アル真感心ス其餘心事萬緒アリト雖モ中々昏上ノ及フ所ニ非ス右耳早々謹言

三月廿七日

田村昌宗

大隈重信様

追テ博多ハ佐賀ニ景況荒迂相認メ高柳熊六宛ニ狀中ニ託シ差上候處同人出張跡ニナリ戻來リ候ニ付今又本文奉呈候最早佐賀景況及ヒ戰爭ニ始末等ハ遣御承知与存候ニ付別段不申上候當月十三日博多出發同十九日熊本着暫クハ滯陣可致哉与被存候總督殿(龍形親王)ニも今廿七日着相成候惣軍何モ此地滯陣ノ無事ニ苦ミ一時も早ク陣拂ニ命下ランコトヲ冀望スル景況ナリ小生ニモ會計上ニ付阪地出發來是迄ニ費用取約



メ方願ハ此滯陣中決算爲致候合ニ着來寸暇も無之亦地方官へ關係  
 之件多々有之候ニ付兩三日中懸リ之者出張爲致夫々取調候筈ニ御  
 座候若シ滯陣中相運兼候ハ、少々ハ跡殘リシテモヤリツクル積リナ  
 リ一體無餘儀實情等も有之速ニ歸京ニ念慮頻リナレ共ヤリカ、リノ  
 事ナレバ致方無之決算相立歸京之上ハ先此事務ハ御斷リ申上度心得  
 ニ御座候頓首

別啓

佐賀戰爭ニ係リ候野津少將壹手いつせも一應歸京歸阪之積リ即今滯陣之  
 無事ニ苦ミ種々申立ル景況ナリ野津(鎮雄)も東京ヲ發スル時ハ熊本鎮臺出張ニ  
 亦永ク同所滞在ニ心得ニ有之候處博多ニヲイテ佐賀征討之譯ニナリ十分  
 戰爭ヲ遂ラレ兵隊モ疲勞甚タシ依テ此度ハ惣兵取纏メ一旦歸京ニ積リ致  
 シ被居候處今般野津ニ限リ滞在ニ命アリ是必大灣(臺)之事件ナラン然モ此兵  
 隊ヲ以テ共ニセント云フ然ルニ兵隊ハ交代兵着次第引拂候事ト頻リニ喜

祝ヲ含ミ居此直リ致齟齬甚タ氣之毒千萬將又野津ヲ始メ少々不平ノ氣味  
 も有之哉ニ被存候譯ハ兵ノ進退ニ付政府ハ御下令或ハ相違ノ件も有之  
 哉ニ兵馬ノ全權アル總督出征相成居候上ハ兵ノ進退此地ニヲイテ決シ  
 テ可ナラン若シ決スル能ハズンバ總督ノ任何ニ在ルヤト潜言頻リナリ  
 兎角此度ハ野津ヲ始メ一旦歸京相成候様御處置適宜乎ト相考候御心得ま  
 て進言仕候也

四一三 三條實美書翰

「大隈重信宛」 明治七年三月二十八日

西郷ハ別紙ニ通届出候間此段相通申候臺灣處分書付清書出來候ハ、早々  
 御廻し有之度候右ケ條中殖民略地之事ハ是迄ニ評議ニも決議と申ニも無  
 之木戸ニも篤与談置不申候間今一應評議無之ハ不都合与存候尤取締ニ  
 爲彼地實際ニ景況ニより蕃民懷撫ニ爲都合次第右等之事ニも可及目的ナ  
 ラハ別段評議ニも及間敷候併前日ニ議ハ問罪一途ニ處ニハ一同承知致居



候事ニ付略地之事ニ相成候ハ、又夫なり之評議ニ不相成候てハ異議も可相立と存候任序申入候尙期面陳候草々不備

三月廿八日

實美

大隈參議殿

【備考】 是より先、三條、重信等に命じて、臺灣處分方法を調査せしむ、是日この書を以て、その提出を促し、且注意する所あり、かくて成りしもの四月五日の蕃地處分委任狀及び特諭等なり、四月三日岩倉の書翰もこのことに係り、その日重信は天皇に謁してこの事を具奏したるが如し、参考のため蕃地處分委任狀特諭書を其の日に掲ぐ、參看すべし、

四一四 岩倉具視書翰「大隈重信宛」 明治七年三月二十九日

深く御注意被下度事ハ臺灣一件親 勅并御委任狀之義ニテ一重大事と存候也

昨日西郷入來津田大輔云々之事懇々承り候所武官ニハ大輔ニハ少將ヨリ兼官ノ譯ニ趣也乍如何初テ承知右ニ候へハ無差支相考候ニ付條公(津田出)昨日木戸始メ何レニハも無異存旨故今朝速ニ津多少將へ兼大輔并代理被命候様申入候事ニ候西郷よハと苦慮ニ様子今朝否可申入旨申置候間内々一應御通達置可給候早々以上

三 廿九

具視

大隈殿

四一五 蕃地處分目的十三條 明治七年三月

- 一 臺灣蕃地事務都督ヨリ福州及ヒ臺灣ノ地方官へ書簡ヲ送ル事
- 但 鄭永寧案文スル事
- 一 都督ハ公使ト電信ノ暗號ヲ牒合スル事



- 一 此舉ニ付清國ヨリ萬一彼カ手ニテ處治スヘクナド申出サハ都督公使ハ(柳原前光)我本國政府ノ命令ヲ聽テ進退スルノ詞ヲ要トス
- 一 都督及ヒ領事ハ彼地方官ト對談ノ事情ニヨリ其儀ハ貴官等自ラ貴政府ヘ被申立在北京ノ我公使ト談判有之可然ト相答ヘキ事
- 一 都督ト東京本局及ヒ在北京公使ト通信心得ノ事
- 一 福島九成ヘ厦門領事ヲ兼任シ吳碩及英語通辯ノ者隨行セシムル事
- 一 右領事等地方官ヘ對面シテ蕃地事務舉行ニ付辯解スヘキ主意書ヲ作ル事

一 臺灣領事ハ同所米國領事ヘ代理可托ニ付彼地方官ヨリ之レヲ認明スル様ニ可取計事

一 厦門ヨリ福州ヲ兼管シ臺灣ヨリ淡水ヲ兼管スル事  
但領事著任ノ上其委任狀ヲ地方官ヘ示シ假ニ事務取扱フコトヲ得ヘシ我公使ヨリ北京政府ヘ掛合ノ後ニ認可ノ布達アル事

一 李仙得ハ臺灣事務局准二等官ニ轉任ノ事

一 平井(希昌)ハ外務少丞ヲ以テ臺灣事務局兼勤當分彼地ヘ出張ノ事

一 田邊(外務少丞、太)ハ臺灣事務局兼勤ノ事

一出兵ハ本月十八日九州熊本ヲ發シ同二十八日臺灣社寮ヘ著スル事

明治七年三月於大隈參議邸左ノ記名ノモノ協議決定候事

明治七年三月

參議兼大藏卿 大隈重信  
參議兼外務卿 寺島宗則  
陸軍少將兼陸軍大輔 西郷從道  
特命全權公使 柳原前光

四一六 三條實美書翰「大隈重信宛」 明治七年四月二日

臺灣事件取調之次第

大隈重信關係文書第二 (明治七年四月)



御直ニ被聞食候間明日午後二字比皇居に御參可被成仍此段申入置候也

四月二日

實美

大隈殿

四一七 伊達宗興書翰「大隈重信宛」 明治七年四月二日

拜啓益御清康被爲在欣然之至奉敬賀候然之當管下從來官業之鏡山今般和歌山縣下商大坂府下寄留津田達藏へ受負稼申付候義ニ付鏡□□ナト唱スル者不伏之儀申出候付其筋係之官員ヨリ説諭仕らせ候とも指令不伏之廉ヲ以テ内務省へ直訴仕候者も有之歟難計候付表面不條理ノ儀ニ付其趣ヲ以テ上申仕置候へ共尙御不審之廉被爲在候得ハ私御召寄御尋問被成下度明瞭辯解申上度候依之寸楮奉呈上陳仕候恐惶謹言

第七年四月二日

廣島縣權令

伊達宗興

大隈公

閣下

又日時下御自重是祈

四一八 岩倉具視書翰「大隈重信宛」 明治七年四月三日

臺灣事件過日來不一方御盡力是ハ内外情態深御遠慮ニ而爰ニ運ヒ候事ト感佩此事ニ候附ハ貴卿寺嶋(宗卿)柳原(前光)西郷(從進)赤松(則良)も一夕御同席緩急ノ砌云々能々御打合置ノ事第一と存候よろしく依頼候

一谷進(干城)退伺ニ付御沙汰書之所昨日西郷同席御承知之通故條公に宜敷御申入可給候尤同公ニハ昨夕一通り申入置候事ニ候明日小生不參ニ付頼入候事  
一津田大輔谷參謀カ其外被仰付之事手落無之様御盡力可被下候



一 津田事可爲代理之旨正院に御沙汰願度トノ事西郷申居候是も明日よろしく頼存候事ニ候

一 臺灣事件片附候上ハ速ニ朝鮮事件宗始メ之御取計頼存候夫ニ付柳原發途無之前支那云々十分御咄し置可給候

一 臺灣書類小生方ニテ寫取候分差出し置候跡御返し可給候不急候也  
右早々如此候也

四月三日

具 視

大隈 殿

臺灣件木戸少々異論も候得とも條公小生ニテ懇談可申候間是ハ御放慮可給候

四一九 岩倉具視書翰「大隈重信宛」明治七年四月三日

先時申落シ候臺灣御委任狀中寺嶋(宗則、外務卿)頻(琉球)リヨリウキウ人暴殺備中人云々之事等無之ハ不都合哉ト申居候尙同人に御懇談可給候他日事アルノ日同人關係之事ニ付御入念可給候早々以上

四月三日

具 視

大隈 參議 殿

【參考】 西郷從道等への御委任狀 明治七年四月五日

臺灣蕃地事務都督西郷從道

臺灣蕃地處分ニ付汝從道ニ命シ事務都督タラシム凡ソ陸海軍務ヨリ賞罰等ノ事ニ至ルマテ委スルニ全權ヲ以テス乃チ委任ノ條款ヲ遵奉シ黽勉從事其レ能ク成功ヲ奏セヨ

- 一 我國人ヲ暴殺セシ罪ヲ問ヒ相當ノ處分ヲ行フヘキ事
- 一 彼若シ其罪ニ服セサレハ臨機兵力ヲ以テ之ヲ討スヘキ事



一爾後我國人ノ彼地方ニ至ル時土人ノ暴害ニ罹ラサル様能ク防制ノ方法ヲ立ツヘキ事

明治七年四月五日

御名 御璽

奉勅

太政大臣三條實美

【參考】

西郷從道等への特諭狀

明治七年四月五日

臺灣蕃地事務都督西郷從道

明治四年十一月我琉球ノ民漂流シ臺灣ノ蕃地ニ至リ土人ノ爲ニ劫殺セラル、者五十四名又六年三月我小田縣下備中淺江郡ノ住民佐藤利八等四名漂流シテ亦爲ニ衣類器財ヲ掠奪セラル其土人兇暴ヲ逞フスルヤ如此而テ支那政府ノ管轄ニ屬セス化外自肆ニ任ス若シ棄テ問ハスンハ後患何ソ極ラン今膺懲ヲ行フノ意ハ彼野蠻ヲ化シテ我良民ヲ

安スルニ在リ宜ク此旨ヲ體シ左ノ條款ヲ遵奉シ以テ從事スヘシ

第一款

一第一著眼トスヘキ土人ノ服從セル者ハ專ラ恩惠ヲ以テ之ヲ懷ケ綏スルニアリト雖若シ抗敵シ服セサルニ於テハ兵威ヲ以テ之ヲ制壓スヘキ事

第二款

一鎮定後ハ漸次ニ土人ヲ誘導開化セシメ竟ニ其土人ト日本政府トノ間ニ有益ノ事業ヲ興起セシムルヲ以テ目的トスヘシ但シ此場合ニ於テハ支那政府トノ關係及ヒ後來ノ利害等ヲ詳明ニシ上奏シテ命ヲ乞フヘキ事

第三款

一彼ノ地ニ手ヲ著グルニ方テハ支那人及ヒ他ノ外國人ノ妬猜ノ念ヲ引起シ我カ所爲ヲ妨ルコト無ラシムルニ注意スヘキ事



第四款

一若シ支那政府ヨリ異議ヲ起スコトアレハ之ニ關係セス我カ北京  
在留ノ公使ヨリ應接ニ及フヘキ旨ヲ以テ答フヘキ事

第五款

一著手ノ際ニ臨テ便宜支那人及ヒ他ノ外國人ヲ傭役スヘキ事

第六款

一一行役員中ニ於テ少シモ不和ヲ生セシムルコト無キニ注意シ毎  
事必ス協同商量セシムヘキ事

第七款

一李仙得ヲシテ輔翼タラシメハ其考案ヲ諮ヒ且土人ヲ懷服セシメ  
又支那地方官或ハ他ノ各國領事ニ對シテ應接等ノ事ヲ掌ラシム  
ヘキ事

第八款

一支那管轄地ト犬牙錯雜スル處ハ能ク其經界ヲ明カニシ彼ヲシテ  
我ヨリ侵略スルノ嫌疑ヲ生セシムルコト勿キニ注意スヘキ事

第九款

一此地ニ別ニ事務局ヲ開キ命令布告等總テ之ヨリ達スレハ凡ソ申  
請報告等一切本局ヲ經テ上奏スヘキ事

第十款

一諸費用ハ務テ簡約ニ從ヒ濫冗ノ弊ナカラシムルニ注意スヘキ事  
右條款ノ外細事ハ專決シ大事ハ上奏シテ命ヲ乞フヘシ

明治七年四月五日

御名 御璽

奉勅

太政大臣三條實美



臺灣蕃地事務參軍谷 干城

各通 同 赤松則良

臺灣蕃地處分ニ付陸軍中將西郷從道ニ命シテ事務都督タラシム凡ソ  
陸海軍務ヨリ賞罰等ノ事ニ至ルマテ委スルニ全權ヲ以テス汝則良ニ  
參軍ヲ命ス其能ク帷幕ノ機謀ニ參シ凡<sup>陸軍</sup>ニ關スルノ事ハ厚ク都督  
ヲ輔翼シ速ニ成功ヲ奏セヨ

明治七年四月六日

御名 御璽

奉勅

太政大臣三條實美

四二〇 吉田清成書翰「大隈重信宛」 明治七年四月七日

尙々伊東昇等之議も合セテ進呈候也

租稅〔松方正義〕頭〔貞秀〕を別帑貳通唯今差出候横山義ハ御存知之通極適當之事と存候小池〔國武〕  
義も餘程勉強ものにて租稅之事務ハ申も不及其他律則等も明るく不  
被缺一人物之由松方を陳述有之殊ニ近日他省を渴望する之聞へも有之旁  
御昇用有之候様はし度候間御檢印ヲ仰候キンドルを再三ノ書一見は  
し候返書ハ明日迄ニ入御高閣候様可致候其他異事おし〔鹿島縣權令〕關義臣出京有之  
候是ハ先般を御相談ニ及置候米澤藩士は下屋敷之地券ヲ不渡上地ノ命ア  
リシヨリ終ニ多少之不都合ニ立至り芹澤參事免職ニも至り尙其後關義臣  
取調中之處此節粗其調相濟候由にて何をも土民へ可下渡條理有之をの  
由ニ御座候右ハ御互ニ同意之事にて自然同人推參仕候ハ、御直々御聞取  
可然御高裁有之度候早々

四月七日

少 輔 清 成

大 藏 卿 殿



閣下

四二一 黒田清隆書翰「大隈重信宛」明治七年四月十一日

前文略ス

儲テハ玄武丸云々數度之御懸合逐一致承知候別冊御條約書正ニ落手致候  
明十二日赤松殿(前良)面談之上ニ決答相期候扱又今日御互ニ信義ヲ立テ軍國  
之大事ヲ重シ候ハ再度云々申進候事ニ付全ク西郷都督之約束齟齬スル故  
へ何ク迄も念ヲ入レ候ニ付詰問ト申譯ニ者毛頭無之候條不惡様御了承可  
給信義立テハコソ幾萬里隔絶ストモ盡ク圖ニ當リ其ノ機ヲ失サルト愚  
考罷在候間幾重ニモ詰問ト御引受ハ甚迷惑ニ御座候此旨早々御答申入候  
也

四月十一日

黒田開拓長官

蕃地事務局長官

大隈重信殿

閣下

四二二 三條實美書翰「大隈重信宛」明治七年四月十四日

臺灣處分之義ニ付(從進)テ各國公使ハ段々外務省ニ應接之次第も有之候右  
爲心得西郷眞吾方へ應接書寫相廻し候ハ、可然存候萬一他日應接書之趣  
と齟齬致候様事出來候テハ不都合ニ付相心得させ候事可然存候右愚意申  
入置候宜取計有之度候也

四月十四日

實美

大隈參議殿



四二三 吉田清成書翰「大隈重信宛」明治七年四月十四日

此内々度々キンドルと閣下と往復之後尙もキンドルにおひて誤解之廉有之候哉にて甚た不都合之至ニ候就ハ東洋銀行とキンドルとの條約并政府と銀行との約書等取調見候處全くキンドルにおひてハ誤謬ニ出候義ハ判然致居候就ハ此末縷々及往復候義も到底不益ニ屬し候旁以一應東洋銀行に往復書翰之寫ヲ添申入れロバルトソシ思慮ヲ問ひ且ツ何とハ同人々キンドル方へ申入候方可然と存候間後刻々ニハ原譯共差出候様可致候間早々御一覽可否御決定之上ハ至急御返却有之候様致度候

本田親英義之警保寮七等出仕ニ補せられ候様致度候就ハ何れ老臺之御添力ニあらされハ難被行候間宜布御盡力奉願候此義先日ハ參堂可申上と存し居候處老臺も御多忙中之事故態与差控居候へ共不取敢序ニ申上置候草々

四月十四日

清成

重信老臺閣下

四二四 岩倉具視書翰「大久保利通宛」明治七年四月十五日

別紙去ル十日出帆便ニ可差出存候所運送船都合彼是ニ延引漸々明十六日出帆之旨扱々不都合候委細赤松始ハ御聞可給候

○江藤始メ處刑誠ニ意外速ナルハ大御憤發之事と御心中千萬令遠察候

○毎々申入候通り偏ニ御歸東之事屈指御待申候最早不日御復命之事と存候

○佐賀縣令之事三浦も六ヶ敷様子外ニも色々評議候得とも是も歸東之上ニ可相成哉と存候

右早々如此存候也

四月十五日



具 視

大久保利通殿

【備考】明治七年四月十三日江藤新平佐賀に梟せらる、

四二五 三條實美書翰「大隈重信宛」 明治七年四月十九日

一筆進達候叔臺灣處置ノ事ニ付米國公使ヨリ云々申立ノ次第有之候ニ付  
態々以使相達申候右外務卿談判ノ顛末ハ即應接書從寺島可相廻候間夫ニ  
テ詳知有之度右米人リゼンドル始人員並船艦臺灣ニ航行候事被差止候ニ  
付テハ第一此節ノ一舉モ專ラリゼンドルニ依頼シ殊ニ外國ニ關係ノ事ニ  
至リテハ同氏ニ委任ニモ相成居候處前條ノ次第ニ付テハ其儀モ不相整且  
船艦等ノ需用モ被差止候上ハ此度ノ一舉成功ノ目的萬々有之間敷所詮難  
施都合ニ立至リ可申且支那政府トノ引合モ唯柳原大丞（前此）昨年應接ノ次第ノ  
ミニテ屹度手順ノ相立候引合ニモ不相成居支那政府ノ承諾無之ニ彼地ニ

兵隊ヲ上陸處分相成候事各國公使追々議論相起リ外務卿ニモ兎ヤ角辯解  
ニハ相成候ヘモ何分於我政府手ノ不届次第ニ有之且各國ノ公論臺灣ハ支  
那ノ版圖タル事判然タル上ハ何レ支那政府ヘ使節ヲ以テ遂應接候上著手  
ノ順序ニ不相成候テハ相成間敷ト段々評議ノ次第モ有之候ニ付足下ノ處  
速ニ歸京相成候様可被致今日ニ至リ如此次第實際ノ處分定テ困難配神ノ  
事ト存候已ニ時機ヲ失シ候上ハ致方有之間敷不得已足下歸京御沙汰ニ相  
成居候間何分早々上京可有之西郷都督儀（從進）ハ隨行官員兵隊諸艦ノ取纏モ可  
有之且前段ノ都合ニ付更ニ御委任ノ事件モ有之候ヘハ暫政府ノ命令ヲ相  
待候様通達可有之仍テ北海丸長崎ニ回艦ノ儀相達金井内史差遣シ申候尙  
從同人可申入候亦福島參謀儀同港著ノ上ハ足下ノ指令ニ從ヒ進退可致相  
達置候間同人ノ進退ハ都合可然指圖有之度候右條々申陳度如此ニ候也

四月十九日

實 美



大隈參議殿

二伸足下御見歸ニ付テハ都督始諸官兵隊等ノ取纏ハ何トカ處分相附  
置不申テハ歸京モ難致都合ニ可有之其邊可然協議取計有之度候事

四二六 三條實美覺書「大隈重信宛」 明治七年四月十九日

今般臺灣島御處分ニ付既ニ橫濱ガゼツト其他ノ各新聞ニ掲載有之候ヨリ  
各國人民ヘモ夫々傳播イタシ米國公使外務省ヘ出頭應接ニ曰ク此度臺灣  
蕃地御著手ニ付兵隊等御差向ケニ付テハ支那政府ヘ稔ト御談判有之候上  
ノ事ニ候哉對テ今般著手ノ件ニ付改テ應接ハ無之候ヘ共昨年中副島大使  
使清ノ節臺灣蕃地ハ政權ノ不及所全ク化外ノ民タル旨應答有之候ニ付此  
度ノ處分ニ及候云々彼素ヨリ米清及日本ニモ互ニ對等ノ條約有之若シ兩  
國ノ間紛紜ヲ生シ候節ハ夫々和解取扱候トノ事モ條約上ニ掲ケ有之旁以  
テ支那政府ヘ篤ト御熟議ノ上ニ無之候ハ、第一米國ノ艦船ハ勿論リゼン

ドル其他日本在留ノ米人民一人モ貸渡候儀ハ決テ不相成候ニ付在留人民  
ヘハ直ニ其旨布達可致リゼンドル等ハ御雇ノ者ニ付宿所等モ不相分候ニ  
付同人等達ノ儀ハ政府ヘ御依頼申度一體臺灣島ノ儀ハ支那政府ノ政令及  
不及ハ差置同國ノ屬島タル事ハ各國トモ許シ認メ有之儀ニ付船人トモ貸  
渡候節ハ支那ニ背キ日本ヘ荷擔イタシ候姿ニ付米清ノ交際上オイト決シ  
テ不相濟云々我種々辯解モイタシ候ヘトモ到底直正ノ條理ニ付外務卿オ  
イトモ語塞リ候程ニ有之此ノ他英國公使ヨリハ臺灣處分ニ付英ノ損失等  
モ釀シ候節ハ其償可致トノ條約申受度云々此外各國公使ニモ種々ノ物議  
有之困却ノ事ニ有之候

右ニ付至急評議イタシ候ヘトモ差向キ良策モ無之依テ大隈參議ニハ早々  
歸京可有之西郷都督ハ長崎港オイト再命有之候マテ滞在可致旨大隈ヨリ  
可申達福島九成儀ハ隔絶ノ地ニテ事情モ悉兼儀有之間同人進退ノ儀ハ大  
隈參議ニ委任可致各國公使ヨリ如此紛紜議論差起リ候ニ付テハ此舉ノ成



功無覺東ノミナラス清政府トノ交際上葛藤ヲ生シ候儀ハ必然ノ事ニ可有  
之ト一同評議候ヘトモ奇策モ無之候間西郷都督トモ篤ト熟談ノ上早急歸  
京有之候様可申達事

大久保内務卿モ不日歸京可相成報知有之候事

【備考】重信、著地事務局長官として、是月十七日長崎に赴き、生蕃征撫の事を掌  
らんとす、重信の東京を去るや、俄かに米國公使等異議を提出す、三條太  
政大臣、寺島外務卿等大に驚き、その狀を報じて、重信を召還せんとす、こ  
の書二通は共にこの事に係る、

四二七 大木喬任書翰「大隈重信宛」 明治七年四月十九日

御内覽御覽後  
御火中

海陸無御滯御着崎奉拜賀候

さて、御發途後昨十八日より米國公使(ジョン・ビンハム)云々申出勿論外務卿種々談判相成  
候由ニ候得共何分程能折合相付き兼候趣ニ御座候爰ニアル人之考ニ此上

ハ先ツ舟路ヲ轉シ支那談判ニ御遣相成候ハ、御手順も相立彼の米人等も  
我ガ用ヲなすニ妨げなく然上蕃地ニ十分御手ヲ被付候ハ、如何ト申説も  
有之候内外之折合御大事之場右之説御一考之爲にも可相成ト御内々申入  
候兎角一先御歸京速ニ調理相運候様希望する所の外他ナシ頓首百拜

明七四月十九日認

大木喬任

大隈盟臺

閣下

四二八 大隈重信書翰「李仙得宛」 明治七年四月二十七日

手翰ヲ以テ申入候然ハ東京ニ在ル米國特命全權公使ヂヨン・エ・ビンハム氏  
儀今度フアルモサ出張ノ事件ニ付異論有之貴下ヲ始メカッセル、ワツソン  
兩氏ノ出張ヲモ我政府ヨリ差留候様四月十九日附ノ書翰ヲ以テ申立有之



候段東京政府ヨリ申來候且同時ニ貴下及ヒ前條兩名ヘ米公使ヨリノ書翰  
三通差出サレ貴下宛ノ書翰ハ拙者落手イタシ候ニ付即刻御達申置兩名宛  
ノ分ハ北海丸船中ニテ福島氏(領事九段)ヨリ夫々配達イタシ候ニ付ビンハム氏異論  
ノ趣ハ各委詳御承知ノ事ト存候因テ別紙米公使四月十九日付ノ書翰等相  
添前條ノ次第貴下ヘ及御達候條此旨領承前陳兩名ヘモ御達有之度候敬具

明治七年四月廿七日

蕃地事務長官大隈重信

李仙得貴下

四二九 五代友厚書翰「大隈重信宛」明治七年四月二十九日

去ル十七日崎陽ヨ御出發相成候由猶御安康御着崎御滯留ト奉存候隨拙生  
ニも無異去ル廿三日着京消光罷在申候間乍憚御放念被下度扱疾電信ニ亦  
御承知相成候半ホルモ一サ一條米公使(トシ)云々申立候處より廟堂再ハ紛々

終大久保出崎ニ相成御面會ニ上モ至當之御所分有之候半大久保も歸東京  
ハ雜客群來未趣意をも不相分候得共不動事山ニ如少しモ安心仕候得共必  
竟外務(寺島宗則)之應接不至より今日ニ至リ遺憾不少奉存候可成モ押付出軍候様專  
念罷在申候若此上支那ニ使節御差立相成儀ニ御座候ハ、ホルモ一サ北岸  
支那之管轄内通行せるの談判を遂候様談付度之のニ御座候勿論右米人如  
斯行ひを傳聞仕居申候間乍陰苦慮罷在不取敢言上仕候御宿元皆様御元氣  
之由併妻君世評を聞テ頻ニ御心配之由昨日早川ニ參リ云々承申候間今朝  
一寸御留守ニ參上御直ニ御説諭申上候心得ニ御座候何分ニも速ニ御所分  
御歸東京奉待上候此旨奉得尊意候勿々頓首

四月廿九日

松陰生

重信閣下

吉田松方(正義)ニも勉勵罷在候由ニ御座候北畠早川(治房)様此節之景況ニモ餘程

大隈重信關係文書第二 (明治七年四月)



苦心罷在申候

四三〇 大隈重信書翰「三條實美宛」 明治七年五月三日

一 翰拜啓仕候今般長崎著港即刻宮川縣令<sup>(房之)</sup>之電報北海丸到著迄<sup>(之港)</sup>西郷都督以下一同此地ニ可相待旨御下命有之四月廿五日北海丸來港金井權少内史ヲ以御直書御下付外ニ外務省關係之書類等逐一承知仕候然ルニ其後日々暗信を以上申仕候通軍氣強盛其勢如何共不可制此際尊命ニ隨一應歸京之心得候處物情是ならず彼此掛念之末去留之間果斷致兼日夜苦慮罷在候折柄大久保參議此表出張被命候付同人著崎迄滞在可致旨御指揮ニ付於是始<sup>(前芳)</sup>る決意偏ニ同人入港而已相待申候尤著港以來之順序之時々電信奉告之通ニ候得共其情實ニ至テハ千困難筆楮之所能盡ニ候因<sup>(前芳)</sup>る山口外務少輔儀モ實際之景況粗承了罷在候間同人船便ヲ以爲致歸京大略之次第爲及具狀申候明日モ大久保參議到著ニ付極<sup>(前芳)</sup>る御指圖之趣も可有之尙同

人打合精々盡力可仕心得ニ御座候恐惶謹白

七年五月三日

參議 大隈重信

三條太政大臣殿

四三一 大久保・大隈・西郷連署決議條件 明治七年五月四日

甲

- 一 カツセル、ワツソン兩氏行違ヲ以テ有功丸ヨリ出帆致シ候ニ付西郷都督到著迄ハ其儘待受候様電報ヲ出ス事
- 一 西郷都督到著ノ上ハカツセル、ワツソン兩氏ノ雇ヲ放免シ早々差返シ候事
- 一 李仙得ハ早便ヲ以テ歸東致サセ候事
- 一 生蕃處分濟ノ上兇暴ノ所業ヲ止メ我意ヲ遵奉スル迄ハ防制ノ爲相應ノ



人數殘置ヘキ事

一生蕃處分ニ付清國ト關係ヲ生シ萬一事變ヲ醸スノ時宜ニ及節ハ雇入ノ英人其他ヲ免シ同船艦ヲ返スヘキ事

右條件御委任中ニモ掲載有之候ヘ共更ニ協議一決致シ候事

明治七年五月四日於長崎

參議 大久保利通印

參議 大隈重信印

陸軍中將 西郷從道印

乙

明治七年五月四日於長崎左ノ件々ヲ決ス

一 柳原公使至急派出セラルヘキ様東京ヘ電報差出シ候事

一 西郷事雇船或ハ買得船ヲ以テ至急生蕃社寮ヘ出發スル事

一 大隈事柳原公使當港著迄待受篤ト旨趣申含メ協議致スヘキ事

一 大久保事明五日中出帆實地ノ景況ニ依リ進退決著ノ形行可及言上事  
一 前條決著ニ付難題ヲ醸出シ候節ハ大久保始其責ニ任スヘキ事

大隈參議重信印

西郷中將從道印

大久保參議利通印

四三二 大隈重信書翰 [大久保利通宛] 明治七年五月十日

上海領事品川忠道ヨリ本月四日付書面別紙甲號ノ通申越候間不取敢乙號ノ通及回答候就テハ柳原公使儀ハ貴下御著京ノ上直チニ出發赴任相成候様御處分有之度尤拙者此地ニテ同人ヘ面談ノ運ニ御打合置候ヘ共其後大臣殿ヨリノ御下命ニハ貴下御歸京無之間ハ公使出發不爲致トノ趣ニ付公使ヘ懇諭ノ儀ハ渾テ貴下ヘ御付托イタシ候間宜敷御取計有之度存候依テ別紙相添此段申進候也



七年五月十日

大隈參議

大久保參議殿

追テ正院御上申等ノ儀ハ總テ御依頼申進候也

甲第  
二號別紙

臺灣一事ニ付當地道臺ヨリ別紙ノ通今日懸合越候ニ付早速電信ヲ以略報仕置候外幸便船有之候ニ付現在清國ノ景況詳細入御一覽候計ルニ別紙ノ主意ハ天津邊ノ評議ニ出ル處ニ可有之既ニ昨日天津船著到候ニ付多分通商大臣李鴻章ヨリ掛合ヲ受候ニヨリ斯ク掛合越候事ト存候柳原全權公使著崎相成候ハ、御示談被成下度若又出發後ニ相成何方此儀ニ付御掛合ノ儀モ可有之哉ニ存候間事ノ緩急ニ寄リ電信或ハ郵船便ヨリ御掛合被下度於當地此後ノ計ヒモ右ニ准シ再報可仕此段申上候也

明治七年五月四日

領事 品川 忠道

大隈臺灣事務局長官殿

乙別紙

本月四日附第二號貴札昨九日相達致披見候臺灣一事ニ付道臺ヨリノ來翰全文寫一通回送縷々細示ノ趣致詳悉候柳原全權公使既ニ彼地出發ノ處大久保參議今般更ニ長崎出張被命同人歸京ノ上公使出發ノ運ヒニ有之然ルニ大久保參議ハ去六日此地御用相濟歸京候間不日公使赴任可相成候尤モ是迄追々致通知候通り今般蕃地處分ノ儀ニ付訛言謬傳不少自然支那政府ニオイテ過慮ノ程難計候ヘトモ固ヨリ同政府ニ對シ交和ヲ破ルノ微萌ヲ醸成可致様成不條理ノ舉動ハ於本朝誓テ無之事ハ喋々言不相待明了ノ儀ニ候ヘハ此旨深ク被致承認公使赴任マテノ間百般注意外議ノ紛紜渾テ可致看破候因テ回答旁申入候也

七年五月十日



在長崎

大隈蕃地事務局長官

品川上海領事殿

【參考】

三條實美書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年五月十一日

御安全奉賀候勝(安考)より別紙之通申越候間入御覽候如何可仕哉と配慮罷在候猶明日勝ニも面會之上兎角取計候外無之と存候扱過刻御内話有之候大隈進退之事ハ深く御注意有之度同人義も其罪ハ可有之候得共閣下御洋行以來同氏之盡力昨年大藏瓦解之際ニも畢竟同氏之盡力ニ亦維持も相付候事ニ亦内實ハ尊公御洋行中ハ實ニ必至困難之事而已終始同氏之盡力も不少事ニ亦唯今突然擯斥ニ逢面目ヲ失ヒ候様ニ相成候亦モ無情之事且ハ將來朝家ニ盡力仕候者も如何と存候幾重ニも功ハ功過ハ過ニ亦過ヲ以テ功ヲ不被爲捨様希候事ニ候尊公御洋行中ニ事ハ獨リ拙者之所知ニ御座候間決テ同氏を保護仕候私情無之候間

厚御助力有之度同氏免職之節ハ程能忠告致し同人ハ相願本人も得心ニ亦退官仕候様有之候ハ、兩全之所置も可有之未發事漏れ不平ヲ懷かき候様ニ亦モ甚不可然と存候同氏之功劳も沈没追々非常ノ功ある者も果ハ罪人ニ陥り面目なきをのニ相成亦モ爲朝廷歎息仕候吳々篤く御熟慮奉仰候必らず未發ニ漏泄無之様御注意ヲ奉祈候草々頓首

五月十一日

實美

岩公

【備考】

この時重信參議を以て大藏卿を兼ね、征臺のことあるや、蕃地事務局長官としてその事務を攝す、その權盛なると共に反對亦多し、別紙四月十九日佐々木の書翰等を見るべし、木戸孝允、島津久光亦重信を排斥せんとす、この書は三條公これ等重信排斥の議を聞き、重信の功績を稱揚し、妄りの處置を爲して功臣の名譽を傷けんことを憂ひ、岩倉公に注意せるものなり、重信の功績と實美の寛厚の質とを見るべし、



【参考】

佐々木高行書翰「岩倉具視宛」 明治七年四月十九日

謹る奉拜呈候陳て木戸參議義過日申上候通臺灣事件ニ付議論有之候處今朝密々内務省中へ洩聞候處遂ニ辭表と申ス運ニ立至候趣夫レニ付内務大少丞邊へ大臣公初參議中にも奔走して建言トカ申出候趣夫へ高行迄も其邊申出候者有之さなきだに天下之人心狐疑百端之折節實ニ可愛事ニ萬一木戸免官ニ相成候ハ、最早天下之事も極御難澁と奉存候前體今般臺灣事件と外議も不少且大隈參議會計を以事務局へ掛候事共諸省中にも甚不審相立候も多々有之兼申上置候通同人邊へ能々御注意被遊度と存候處右様臺灣事件之物議有之中ニ天下舉る誹り之有之人を其筋へ掛りニ居り候事共幾部歟朝廷之御不爲ニ奉存候此頃色々承り込候事も有之苦心萬々ニ御座候高行如きは兼々申上候通不肖淺劣之身を以不計も天恩ニ十分浴し候事ニ候得といつ迄も盡力斃レテ後止ノ四字ヲ踏候心持ニ御座候得共何分共朝廷之御

施行振リニ依テハ進退忽チ谷ナランカ之場合ニ立至リ申間敷哉と實  
ニ相成候間先以不取敢今日之光景御參考之萬一ニ申上度先右耳勿  
々頓首敬白

四月十九日

(司法大輔)

高行

岩 公 閣 下

追へ御覽後御丙丁願上候也

四三三 大隈重信書翰「西郷從道宛」 明治七年五月十二日

デルダ一號買入候付テハ船名高砂丸ト致改稱可然存候其旨林海軍大佐等  
へ相達候自然御同意ニ候ハ、格別若御異存モ有之候ハ、至急御申越有之  
度存候也



七年五月十二日

大隈事務局長官

西郷事務都督殿

四三四 大隈重信書翰「柳原前光宛」 明治七年五月十八日

今般御赴任ノ際彼是ノ物議ニ依リ時日遷延相成候へ共到底本月十九日横濱御出發ノ趣政府ノ電報ヲ得御苦勞此事ニ存候御著清ノ上著手ノ順序ハ極テ大久保參議ヨリ及縷述置候儀ト致遙察候へ共可成横神兩港ノ間ニ於テ御面會候へハ支那近況等物語リ猶愚存ノ廉可致吐露心得候處船都合ニテ自然不果其儀遺憾無限候然レモ大綱ノ旨趣當初外務卿并都督等協議ノ條件ニ於テ聊以抵觸スル所無之況ヤ近日廣議益御一定相成候上ハ決テ無顧慮達意御談判有之蕃罪訊問ノ廉ヨリ日清兩國ノ好誼障碍無之様御注意專要存候尤我權力ノ分界双方條理ノ當然ハ更ニ愚言喋々致迄モ無之カ事

御承了中ニ儀ニ付於拙者深信憑罷在候因テ此書ヲ神港ニ留メ供貴閱候也  
七年五月十八日

大隈參議

柳原全權公使殿

追テ近日ノ書類ハ長崎蕃地事務支局（清康）林海軍大佐（實秀）横山租稅權助へ申達置候間同所ニテ御一覽可有之候也

四三五 岩倉具視書翰「大隈重信宛」 明治七年五月二十日

今日御歸東ニ旨欣然扱臺灣事件種々議論ヲ生シ一時ハ中止ヲスルニ至リ彼是不一方御苦慮ト存候附（前光、清國駐劄）ハ貴卿御歸東次第御示談申入其廉速ニ可申通之旨柳原公使（前光、清國駐劄）ハ約定候間明日ハ是非々々得面會度朝十時比ハ十二時比迄ニ所御在宅御待合可給候萬々可申談候仍早々如此候

五月廿日



大隈參議殿

具 視

四三六 岩倉具視書翰「大隈重信宛」 明治七年五月二十一日

今朝(番地事務局原)御苦勞リセンドル渡航都合如何ニ哉尙明朝ニ御出仕と存候其上可承候

柳原ハ心得件々申遣し候事今朝も申入候通りニ付落ナク御示し可給候  
只今傳信別紙至來定ニ三條ニ返答も被致候事と存候得とも此上遅延候  
ハハあしく早々返答可致候早々條公御打合ニ上宜御取計可給候  
英人ドン氏建白入御一覽ニ候近日同人入來候間御賢考も有之候ハ、御同席可然存候  
右早々如此候也

五月廿一日

具 視

大隈三木殿

四三七 三條實美書翰「大隈重信宛」 明治七年五月二十三日

過日(高砂丸)内談有之候艦買入ニ義ニ實ニ今日ニ急務ト存候間海軍卿申談速ニ着手相成候様有之度事と存候一日も早く相運候様心配有之度候勿々不具  
五月廿三日

實 美

大隈殿

四三八 大隈重信書翰「三條實美宛」 明治七年五月二十三日

四月二十八日長崎解纜蕃地へ渡航致シ候有功丸并本月二日同港出帆セル  
孟春日進明光丸三邦丸ノ五艦乗組人員別紙ノ通有之候尤社寮丸ハ本月十



六日高砂丸ハ翌十七日長崎拔錨ノ趣電報有之西郷都督ハ高砂丸乗組ニ候  
ヘ共其餘右兩艦乗組人員明細ノ儀ハ追テ相分リ次第上申仕候依テ別紙相  
添此段致上陳候也

七年五月廿三日

蕃地事務局長官大隈重信

太政大臣三條實美殿

別紙

蕃地渡航五艦乗組人員總計千三百三十三人

日進艦乗組

陸軍少將 谷 干城

陸軍少將 赤松則良

陸軍々醫正桑田衡平

外二十一人

海軍少佐 澤野種鐵  
同 大尉 吉島辰寧  
上等士官十七人  
下等士官三十二人  
一等卒以下百四人

合計百七十五人

【參考】

三條實美書翰「岩倉具視宛」明治七年五月二十三日

久光卿意見書類御廻し申候御落手可給候實に切迫危急之形勢如燒眉  
に相考候何分にも大久保黒田等速に御談合御互に進退を決し候は此  
時と存候草々拜具

五月廿三日

實 美

岩 公



別紙

禮服復舊 租稅復舊

雜稅新規の分免す

違式註違の中苛酷なるは除違式一本に五逆

兵士復舊 陸軍を減し海軍を盛大にす

不急の土木を止む

皇居は此際造營あるへし尤西京の體による

右之件々大久保異議ある時は免職

若御採用なければ僕奉職も無益に付辭職願奉る

甲戌五月

左大臣

太政大臣殿

右大臣殿

【参考】

右條件の外にも有之候得共先即今急にすへきものを申上候也

島津久光提出政府人撰書 明治七年五月二十三日

大隈 吉田

右二人免速ナルヲヨシトス

伊藤大輔 内田少輔

右大藏省ニ任スヘシ

寺島免又ハ大藏歟 上野免

副島參議兼外務卿 齋藤 前原右二人三木

西郷 板垣

御召復職コレハ容易ニ出來カタケレモ御沙汰ハアリタシ

伊地知壯之丞免 松方轉任歟 木下助之 租稅頭權頭ノ間

【備考】左大臣島津久光が廟堂に投じたる政治改革と政府改革とはこれなり、  
重信と島津の確執はこれより始まる、



【參考】

島津久光書翰「岩倉具視宛」 明治七年五月二十四日

愈御清安奉恐賀候然昨日申述置候大隈之一條御所置相濟迄之間參朝差控罷在候に付條公へも宜敷御傳聲奉願候此旨愚意申上置候也

五月廿四日

久光

右府公閣下

【備考】

前記久光提出の人選書にもあるごとく、久光は重信の免職を岩倉に求め、若しこの要求に應ぜずんば參朝せずと申出たり、久光の提言固より無下に斥くべからず、然れども時會々臺灣征伐の事あり、重信を失ふべからず、而して大久保利通の重信を支持するあり、三條、岩倉は間にあつて大に苦心せり、重信亦飽くまで屈せずして久光に反抗す、その間或は久光を助け、或は重信を援助し、或は調停せんとし、廟堂上に幾多の波瀾を起したり、これに關する史料を多く採録せり、併せ看るべし、

【參考】

三條實美書翰「岩倉具視宛」 明治七年五月二十四日

御安全奉賀候然そ久光卿へ尊公ヨリ昨今之中御返答可相成との趣右如何御答ニ候哉拜承仕度候猶又大隈參議義一身上之事ニハ内密ニ切迫之密議ニも相成居候處本人ハ承知不致故歎盛ニ出勤仕居候是程之事ニ相成居候を本人承知無之事も如何と存候何と歎御洩し相成候を如何哉昨日も同人ハ海陸軍興張之御評議有之度頻ニ申居候得共先承リ置候事ニ候仍至密申上度如此候也

二仲黒田次官へも御密談相成度と存候

五月廿四日

實美

岩倉殿

四三九

大隈重信書翰

「福島九成宛」 明治七年五月二十五日

蕃地處分ニ付經費ノ儀五十萬圓ヲ以目途ト致シ候儀ハ疾ク承知ノ通候處



英米公使ノ紛紜ヨリ遂ニシヤフツボリー號デルター號兩汽船買入此回航  
入費トモ既ニ二十萬圓餘相嵩其上渡蕃ノ人數增加且長崎ニテ曠日滞在ニ  
隨ヒ萬般ノ費程自然超過シ實ニ向來用度取續ノ目途相立兼甚苦心此事ニ  
候然レモ事ノ爰ニ及ヒ金穀ノ差支相生候テハ不相濟儀ニ付如何様共盡力  
可致心得ニ有之候唯前件ノ情實熟察有之可成冗用空費ノ弊害ヲ嚴戒シ國  
計ノ障礙不相招様注意緊要ト被存候就テハ一策ニ高砂丸社寮丸等ヲ基船  
ト致シ尙幾艘カ増加ノ上皇清兩國ノ諸港ニ回航シ蕃地ニ可致來往郵便運  
漕ノ便利相開候ハ、爲之我貿易ノ景況ヲ一新シ遠クハ巨大ノ公益ヲ興シ  
近クハ右運送料ヲ以蕃地處分ノ費用ヲ相助ケ申度存候然レモ實際ノ景況  
詳悉不相成候テハ其得失難致一定候間精々深考有之見込ノ趣至急可被申  
立依テ前件ノ事情通知旁此段申進候也

七年五月廿五日

大隈蕃地事務局長官

福島事務參謀殿

追テ本件郵船開業候付テハ支那諸港貿易ノ景況物價ノ高低等詳悉不  
致候テハ相叶カタク候間右ノ件々委シク取調早便ヲ以テ可被申立候  
且又彼我貨幣比較ノ輕重相場ノ損益第一ニハ我貿易一圓銀ハ墨銀米  
銀一樣ニ流通可致候ヤ夫是探索ノ上見込相添縷述有之度尤此旨香港  
領事館詰樋野<sup>(實)</sup>一等書記生ヘモ懇々熟談有之一舉衆美ノ奇策相立候様  
希望候也

四四〇 大隈重信書翰「福島九成宛」 明治七年五月二十五日

本月十八日午後四時厦門出ノ電信相達事情粗致承知候柳原全權公使儀本  
月十九日横濱出發候付著清ノ上百事談判相整可申儀ト被存候抑渡蕃以來  
ハ極テ幾多ノ御苦心ト方々致遙察候於本朝モ一時物議沸騰候ヘモ廟議益  
御一定即今異論無之候此段放慮可有之候且又御雇米英兩艦長崎限ニテ蕃



行斷出候事情ヨリ高砂丸社寮丸ノ兩艘買入候等ノ委曲ハ既ニ可被致熟知ト被存候然ル處長崎ニテ積殘ノ人數並荷物ハ多分有之更ニ今度猶龍丸雇入渡蕃申付候付此便ヲ以テ西郷都督へ百般ノ事々書面ヲ以具ニ相運候間都テ同人ヨリ承知可被致儀ト存候就中國蕃相互ノ往復ハ可成頻ニ致通達事情ノ壅塞無之様注意專要ニ付都督へ申運置候通リ三邦丸ヲ除ノ外孰レカ一艘ハ社寮ニ留置其餘ハ悉皆一旦至急歸朝申付殘品並其餘ノ運漕爲取計國蕃ノ間國旗ノ氣船輪回不絶往復如織相成候様致度候條尙其段都督並參軍等へ可被申立候仍之幸便ヲ以大略申陳候也

七年五月廿五日

大隈蕃地事務局長官

厦門領事福島參謀殿

追テ電信ヲ以概略ノ事情ハ承知致候へトモ詳細ノ景況等相分カタク不日郵便到來候ハ、明了<sup>(略)</sup>可相成ト渴望此事ニ候向後共精々注意大小

ノ形狀無遺漏報知有之度此段申添候也

【參考】

岩倉具視書翰「島津久光宛」明治七年五月二十五日

- 一大隈以下進退は臺灣事件收局の上御處置有之度存候事
- 一目下大久保大隈進退御處置有之候ハ、内外物議相生可申御覺悟可有之儀と存候事
- 一御意見之箇條尤夫々大小輕重の別は可有之候得共容易に御著手ハ決る不可然と存候事
- 右小臣の意見如此候也

五月廿五日

具 視

左 府 公 閣 下

【備考】島津久光が二十三日の提言及び二十四日重信等罷免要求に對する返答書なり、



四四一 西郷從道書翰「大隈重信宛」 明治七年五月二十六日

明廿七日高砂丸開帆ニ付一書拜啓前日崎陽ニ於テ御示談申置候通容易不開兵端見込候處日進孟春兩艦及其他汽船等當琅琦灣先著連日之滯泊中日進艦近傍海岸測量ノ爲脚艇乘廻ノ折柄陸地ヨリ不意ニ小銃四五發打掛候條直ニ本艦ニ乘歸候尤モカツセル等當琅琦邊ノ會長ニハ談判ノ央ニテ容易ニ説得モ届兼候勢ニ候ヘル雨天勝ニテ陣所水害ノ虞有之當地本營ヲ距半時程所謂牡丹社道路四重溪口ニ轉陣ノ見込ニテ十八日斥候差遣シ候處不意ニ被狙撃其後廿一日モ同斷所々埋伏狙撃ニ及候間四重溪口邊三村落ノ土人不審ニ付探偵且兵器取揚ケノ爲メ廿二日ニ及ヒ惣人數二百人許差遣候處悉ク兵器取揚午飯ヲ喫シ他日進撃ノ爲メ試ニ溪間ニ進コト四五町許蕃人石門ト稱スル要害ニ據リ頻リニ狙撃スルヲ以テ不得已接戰二時間ニシテ蕃人遂ニ敗走首十二級ヲ斬リ其他死傷モ極メテ多カラント察スル

ニ右首級中牡丹社首長ノ首モ有之由土人來テ之ヲ鞭答スルニ至レリ我兵亦死傷十四名有之候ヘル爾後石門ノ戰爭生熟兩蕃ノ間ニ傳聞シ大ニ恐怖ノ色ヲ顯ハシ兩蕃トモ追々歸順ノ體ニテ或ハ來テ牛酒ヲ獻スルモノ有ニ及ヘリ因テカツセル等ノ遊説モ亦大ニ行ハレ易ク昨廿四日ニハ生蕃十八社中ツラソ一一等會長悼其篤サバリ一一之會長イサ、マシツト之會長カルトアイ、レンクアン之會長ビナライ、カチライ之會長ツールイ等六名社寮會長ミヤニ因テ牛鷄等ヲ獻シ歸順ヲ乞フニ至レリ即拙官及ヒ兩參軍參謀等面會牡丹人見當次第捕縛可差出者ノ書面等夫々相渡候事ニテ面話中彼等ノ申出ニモ石門ノ戰牡丹人三十名戰死就中會長父子共ニ戰没ニ付大ニ恐怖ノ由其他ニテモ同様ノ風聞有之且其死體ニモ昨夜面會ノ諸會長同様袖徽章並ニ銀輪ノ腕貫等相用候ヘル相違モ無之義ト相見候就テハ我根營諸事相整次第來月二日三日頃ヨリ牡丹地進撃ノ筈ニ付左候ヘハ不日必平定ノ見込ニ御坐候將又去廿二日支那軍艦二隻英軍艦一隻當灣ニ來泊英支那兩



官員モ親シク面會廿三日兩國軍艦拔錨ノ時支那艦トモ互ニ祝砲發應等有之候條當地ノ儀ハ相成丈實効ヲ舉可申心得ニ候ヘハ必御安心有之度此段申進置候也

明治七年五月廿六日

蕃地事務都督西郷從道

蕃地事務局長官大隈重信殿

四四二 關義臣書翰〔大隈重信宛〕 明治七年五月二十八日

既ニ歸裝整了發程ノ際ニ會シ昨廿七日午前第十時頃〔大久保利通〕內務卿ハ封書ヲ以

御用ノ都合有之歸縣ニ儀暫時被見合候様致度云々

右御達ニ付發足延引罷在候

右乍恐何等ニ御用向哉本縣關涉之事哉又ハ小生身分ニ關スル事ニも候哉

甚不安罷在候間微シク御様子露洩願度此段內願仕候事

五月廿八日

(置賜縣權令)

義 臣

御親展 私事

【參考】 大木喬任書翰〔岩倉具視宛〕 明治七年五月三十一日

尊簡奉拜讀候久光公御辞表之外ナシトノ義誠ニ以奉驚候大隈ヘハ昨日も小臣ハ可申述心得ニ罷在候處條公ハしそらく見合セ洩候方可然との御沙汰ニ付さし捨罷在候處今日又々御沙汰ニハ大隈ヘ申通可然ト之事ニ御座候ニ付明日一應小臣ハ同氏ヘハ可申通ト相心得罷在ハる處御座候

閣下ハ御召ニ御諭被遊候も可然候得共少々懸念仕候ハ御體裁如何と奉存候小臣ハ少々大隈ヘ相洩シ候て必同人參殿萬々可被奉伺其節十分御示し被遊候ハ、却御都合ともニハ無之ヤト奉存候此結



局ハ如何ニ勘考仕候も大隈順然辞表仕られ諸事之まとまり茂同人  
被相付候ハ、身退キ名全ク却而美談不過之ト氣之毒ならら小臣よ  
ハ相考申候明日ニハ小臣よも必ス大隈へ罷出候心得ニ御座候御閑隙  
之折ニ一寸拜謁奉願度候間明日明後日之間ニ暫時拜趨可申上奉存候  
尙拜謁之折萬々可申上先以御答爲可申上早々如此御座候再拜頓首

五月卅一日

大木喬任

岩倉右大臣殿

下執事御中

過刻尊書賜リ候折ハ外出中ニ御答不申上失敬之段御海容被仰付  
度奉願候

【備考】大木喬任、島津久光が重信を厭惡し、彼を斥くるにあらずんば久光の出  
仕せざるを知り、重信を諭して自ら辭職せしめ、久光を慰撫し、且重信の  
面目を保ち得べしと考へ、六月二日喬任、重信を訪へり、然るに重信一切

の事情を知り、堂々と自己の立場を述べければ、喬任驚いて馳せ歸り、そ  
の情を岩倉に報告したり、喬任の書翰三通は何れもこのことに係る、

【参考】大木喬任書翰「岩倉具視宛」明治七年六月一日

過刻は失敬申上幾重ニも御寛恕被仰付度奉願候其後直ニ大隈へ罷出  
候處折惡敷他出中ニ亦行向き相尋五代氏之宅と申ス事ニ付今晚迄之  
内再ヒ相尋可申家内へ申殘し又條公へ罷出今朝御合之御主意ヲ體し  
申上置候處篤与御承知之様ニ奉伺候左府公ニもさまで御さし逼り之  
御様子ニ亦も無之兎角速ニ大隈之一事ニ止り結局一着可致ニ付今晚  
ニも小臣へ罷出都合よく可申通との御事ニ御座候右ニ付小臣も今晚  
ニも明早朝ニも必ス面會可申通奉存候左候ハ、必ス御殿へ同人ニも  
御伺可申上奉存候ニ付御合被遊度奉存候先其後之形行御合まで申  
上置候其爲早々如此御座候百拜頓首

六月一日



大木喬任

奉呈

岩倉公殿下

執事

【参考】 三條實美書翰「岩倉具視宛」明治七年六月一日

過刻御書中御密諭之趣敬承御忠告之處奉感銘候小生一身に取り職掌上誠に必至之場合偏御憐恕を奉仰候に今日大隈も臺灣實地戰端を開き候上は海陸之準備一層御廟議を被爲盡候様無之は自分にも御理申上私にて彼地に参り度と申居候臺灣之事は尊公にも御擔當相成候得は右等之處は別御憤發出先不都合無之様御勘考奉願候大隈にも御面會相成候は、可然と存候愚存申上置候草々不備

六月一日

實美

岩倉公

【参考】 大木喬任書翰「岩倉具視宛」明治七年六月二日

太政大臣公右大臣公の大隈へ御一言之御字わさなきを同人少々ハ不平ニ被思候様子も相見へ申候

倍御安靜被爲涉珍重之御義奉拜賀候今日早朝大隈宅へ罷出候處幸在宿ニ付當今政府云々之次第其なりゆき丈先以大略相おし候處可驚ハ委細之事小臣が反て一層詳ニ承知被罷在一件さし起り候節早已ニ承知罷在る由被申候就ハ何者歟双方之様子ヲさぐり眞實がほして兩端ヲ持シ候者多分有之候ト相見申候可歎之次第与奉存候大隈氏之論ニ曰ク左大臣公如此迂遠之事ヲ被申立御維新以來七年之御事業ヲ水泡ニ歸シ候事ノ如シ右等之如キヲ何の御採用有之んやト信用罷在ル也シカシ西也東也天子御宸斷ニ可有之ニ付余等之知ル所ニあらずと又被申ニ余一身之事も自ラ天子ノ御決斷ニよるベシト右



之口氣ニ亦中々辭表等一時ニさし出シ可被申様子不相見候ニ付小臣  
 ニも輕易ニ右之談ニも至り候ハ不可然ト存シ言バヲ轉シ一笑シテ  
 談ヲ終リ申候大隈氏も隨分才子ニ亦最早一件巨細ニ承知して猶不知  
 ものノ如ク日々出勤も被致且如此之口氣ヲ見候得者隨分眷屬等ヲ煽  
 動シテ一議論ヲ可起キノ企テなきニしも不在ト推察仕候就ル者閣下  
 ニも輕易ニ御招き辭表等之御諭ども有之候ル者如何之不平被申唱や  
 も難計且又世間之論も相生シ可申与奉存候ニ付篤与御注意被遊度奉  
 存候右之次第ニ付閣下へ參上被致候様之事も不申聞して罷歸り候得  
 者今日閣下へ御尋被申義ハ有之間敷右様之次第ニ付別ニ御明考不被  
 遊ルハ相濟み申間敷此談話中ニ小生大隈之心事ヲ推し隨ル更ニ勘考  
 も出來候得共筆頭ニ難盡拜謁ヲ以て可申上候彼是ニ付直ニ參殿可申  
 上ト相心得候得共大隈ハ引取掛ケニ參上仕候ハ形跡相顯レ不可然  
 ト奉存候ニ付ワザト參上不仕直ちニ正院へ出頭仕候依ル乍略儀御合

みまで書狀ヲ以テ申上候御一覽之上ハ此書中ハ御火中奉願候御都合  
 ニより參上可申述先者早々頓首百拜

六月二日

大木參議

岩倉右大臣殿

御執事御中

【參考】

小河一敏書翰「岩倉具視宛」明治七年六月二日

老公之尊慮を奉察候ヨ大隈を今日被免候へて臺灣事件ニ付て免官と  
 一統相唱可申候然候てハ彼人壹人ニ其罪を荷ハせて退官させられた  
 るに當り此まゝ御在官ハ難被遊故老公御退職被遊へきとの御見込哉  
 ニ被伺申候右ニ付得失之大權衡を以左ニ申上候  
 一左府公御引入ニ相成不申候ハ、夫迄之事ニ候へ共最早御引入ニ相  
 成候事故既往ハ不可言候此儘日數を経候ハ、何方ニか必不平を醸



し可申候故是非とも一日も早く御出仕ニ相成候様御處置之外無之候へ共左府公ニ御事故大隈殿御處置付不申ては決して御出仕は有間敷候依之過日も御直ニ申上候通大隈殿本官兼官を被免外務省へ一等出仕ニて臺灣事件判理を被命候ハ、右事件ニ爲ニ免官ニ無之と申ハどこ迄も明白ニ可有御座候此御運ニ相成候ハ、左府公も御出仕可有御座奉存候

一右ニ通ニては大隈殿御受有之間敷よしや御受ハ有之候共出仕ハ有之間敷然候てハ矢張老公も御在職被遊兼候との思召に可被爲在哉ニ候へ共外務省一等出仕ニ命下リ候上大隈殿の出仕の有無は前以御推考被遊に不及事と奉存候もし御請無御座候ハ、夫迄ニ事にて夫ハ大隈殿一身上の事とのミ成申候夫共大隈殿出仕無之候ては御在職被遊兼候との仰ニてハ愚者共々奉見候ては大隈殿へ被對ての御義理立と申よこそ當り公明正大ニ尊慮とは難申甚敷申候へハ大

附 箋

隈殿を保護被成候と奉推量ものも有之ましくとは難申程ニ奉存候一いかにしても大隈殿免職ニ成候へハ老公御在職は不被遊と御突張被遊候ハ、(三條實美)丞相公も大久保殿も御同様ニ譯ニ成可申候然候へハ只左府公一人ニ累卵ニ皇國をあて付て御擔ハせられ候ハ御座候よしや、左府公御引荷ひ被成候も仕れ其通相成候て皇國の御爲よろしきと被思召上候哉此儀ハ決して不可然事ト奉存候

一臺灣ニ事件ハ乍恐御失策ニ可被爲在候御失策と思召あたられ候ハ、御在任ニて其疵を聊よても被爲補候御處置こそ御相當緊要と奉存候御失策ハ出候事故半途なるに御退と申てハ皇國ハ被對大不忠に當り申候

一此儘累日を経候へハ左府公遂ハ御退ニ相成外無御座候左候へハ皇國の變を醸し可申候又丞相公も老公も御退被遊候ては皇國の大難ニ相成申候然ル處にては權衡を以て輕重をはかり大隈殿一人を



被退候外無之候夫共頓ニハ不被退前條之通御取扱相成候ハ、御義理は立可申候此旨をもつて老公御發言にて御處置被爲在候に何事も被爲在間敷と奉存候

一此儘にては此臭氣日數重り候程世上に洩可申候左候ハ、大隈殿御一身上ニも必御不爲と奉存候一日も早く御處分付候方御同人之御爲にもよろしかるべく奉存候

右前條之件々得と御勘考にて御一己御願不被遊皇國の御爲に御身心を被盡候御誠心を被爲貫候義只々奉仰願候是皇國の御爲を思候のミならず此一大事件ハ老公之御身上ニ大關係之事ニ候ハ御厚恩ニ浴居候一敏決て黙止すへきにあらずと逆鱗ニ觸るゝも不厭丹心を吐て言上仕候御採用も被下置候ハ、何之幸慶か不可過之候誠恐誠惶頓首謹言

六月二日

(教部省七等出仕)

敏

附  
もし丞相公大久保殿はしらず老公御一分よてケ様など被思召上候ハ、御潔ニ被爲似候て公平ニ見候へハ全く之御私論ニ被爲陷候と可申様ニ奉存候

【備考】一敏は豊後竹田の人、勤王志士として知らる、重信免職問題にて、具視の惱むを聞き、その解決策を説き、事の大小輕重を計り、重信を退け、島津を慰撫するの已むなきを論ず、島津の退職は皇國の變なりといふ處、島津の勢力と一般の人心とを見るべし、

四四三 大隈重信辭職願 三條實美宛 明治七年六月六日

私儀

昨夏以來肝臟充血之症ニ而種々療養差加略及快復ニ候之處當今ニ至再發一層惱苦相増人事難辨程之義ニ付篤と治療仕度候間恐縮之至ニ候得共當職并兼官共被免度此段奉願候以上



明治七年六月

參議大隈重信

太政大臣三條實美殿

【備考】島津久光の議あるや、三條岩倉等は重信の參議のみを免じ、大藏卿、蕃地事務局長官は故の儘とせんとし、漸く島津の同意を得たり、因りて六月六日三條その意を以て重信を諭す、重信此の如きは畢竟予が不徳の致す所なりとて本官兼官共に之を辭せんとす、この辭職願はこれなり、その日附は明かならざれど重信のその意志を發表せしは六月六日なり、次の三條の大久保に宛てたる書翰を參照すべし、また三條の重信を諭せしも是日なり、但し別紙重信の書翰には七日とあり、一日の差違あるは何れの過失か、

【參考】三條實美書翰「大久保利通宛」明治七年六月六日

薄暑之候益清適大賀候然も昨日來黑田次官を掛合申候處同人今朝入來決答之趣領承仕國家之大幸此事に存候猶此上は戮力盡精企望仕候扱大隈參議に會し遂密諭候處同人義畢竟不徳之所致深恐入候趣にて

何卒大藏共總被免候様相願度心事縷々陳情罷在反覆辯論仕候得共何分本官計被免外之處是迄之通奉職之事御請申候譯に至兼申候間先以右之趣内々申入候自然足下面晤に相成候はゞ猶説諭有之候様仕度候前件申述度草々如此候也

六月六日

實美

大久保參議殿

四四四 西郷從道書翰「大隈重信宛」明治七年六月七日

謹呈ス從道嚮ニ全軍ヲ率ヒ去月廿二日ヲ以テ臺灣西南部社寮港ニ着セリ先キ兩次發スル所ノ將卒先ツ假營ヲ車城ノ南郊ニ建テ近傍各地ノ熟蕃ヲ誘導シ漸次事ニ就凡ソ西岸一線該港ヨリ北風港ニ至ルマテ恩威宣布土民爭テ役ニ趣キ實ニ子來ノ狀アリ其南地大樹房ニ至ル又同シク我



風下ニ靡クト雖モ其手ヲ下ス日淺クシテ未タ十分ノ心ヲ収ル能ハス南部ノ生蕃ハ米人「カツセル」及ヒ通辯者ノ紹介ヲ以テ「テ井ラソ」ノ頭目「ト一キトク」先ノト一キ「サコリー」ノ頭目「イサラ」コンスア一ニ呼ヒ已ニ情和ヲ通セリ近比又形勢ヲ探リ社寮ノ西龜山ニ本營ヲ設ケ此ニ轉移セントス凡從道預メ命スル所ノ處分粗成リ少シモ違謬アルナシ然ルニ偶々邏兵ノ生蕃牡丹境石門口ニ至ル者アリ二次蕃人ノ爲メニ狙撃セラレ死傷數人故ヲ以テ將卒悉ク憤ヲ發シ之ヲ報復センヲ謀ル其石門口ニ濱スル一里四重溪ト云該地ノ土人私ニ牡丹ニ通スルノ疑アリ乃チ二小隊ヲ發シ之ヲ圍ミ悉ク各戸ノ兵器ヲ奪ヒ續テ石門ニ進ム生蕃人七十餘人崖門ニ據リ能ク防ク我兵奮闘シテ之ヲ破リ首級ヲ獲ル十二傷ヲ受ケ死スル者二十餘牡丹社ノ頭人父子又同シク此戰ニ死スト云此日ヤ乃チ從道進港ノ日ニ屬セリ從道熟々考ルニ牡丹生蕃ノ不逞ナル兇暴至ラサルナシ彼常ニ支那人ノ柔懦與シ易キニ慣レ外人ヲ見ル「孩兒」ノ如ク敢テ王師ニ抗

シ不敵ノ働キヲナス今僅ニ之ヲ掃撃シ其鋒ヲ挫クト雖トモ到底其巢窟ヲ殲スニ非レハ其殘害ヲ除クニ足ラス且ツ土人稍我恩惠ニ慣レ漸ク我意ヲ生シ叨ニ財利ヲ貪ル等ノ事アリ不如一旦彼レカ鬼視スル所ノ牡丹蕃部ヲ盪盡シ大ニ兵威ヲ派渡及センニハ既ニシテ「テ井ラソ」サコリーノ頭目等「コワルツ」ノ頭目ヲ携ヘ共ニ來リ面見シ各々我命ヲ遵守シ且ツ牡丹蕃人ノ彼地ニ入ルモノ一々之ヲ捕ヘ我營ニ輸サンヲ約セリ又聞ク卑南ノ頭目陳安生嚮ニ打狗ニ在リ我兵ノ牡丹ヲ討スルヲ聞ク急ニ彼ノ社ニ歸リ虛ニ乘シ牡丹ヲ襲ハンヲ謀ルト人心ノ集ル所兵氣ノ向フ所固ニ屈止スヘカラス從道之ニ於テヤ意ヲ決シ大舉ヲ謀ル乃チ兵ヲ三道ニ分ケ本月一日ヨリ次ヲ以テ牡丹ヘ向フ沿道ノ諸蕃悉ク家ヲ空フシテ深谷ニ逃レ入り敢テ支ル者無シ三日全軍牡丹社ニ會シ其巢窟ヲ屠リ燒滅遺スナク四日全軍次ヲ以テ歸營假リニ分營ヲ牡丹山下双溪口ニ設ケ二小隊ヲ留メ之ヲ守ラシム此役ヤ從道初メ獻スル所ノ策ト緩急少シク異ナル



モノアリト雖モ其逐次處分スル所ノ事業大略已其効ヲ収メリ敢テ急遽  
 事ヲ苟スト云ニハ非ス從道是ヨリ專ラ地方ノ事ニ心ヲ寄セ永遠ノ基礎  
 ヲ開カントス然ルニ該地南西ノ風頻リニ強ク船艦ヲ停住スルヲ得ス因  
 テ又兵ヲ「コアルツ」ニ進メ分營ヲ此地ニ建其南岬五巒鼻ノ東灣ニ一港ヲ  
 設ケ先ツ運輸ノ便宜ヲ開キ且ツ土人屈強ノ氣ヲ抑ヘ次ヲ以テ生蕃内部  
 ノ地ヲ處分スヘシ先ツ今日ノ狀ヲ以テ之ヲ見レハ處蕃ノ大綱已ニ定レ  
 リ唯其清國ニ關スル所ノ事或ハ要緊ニ渉ル者アリ預メ其事由ヲ探リ之  
 ヲ處分セザルヘカラス已ニ閩浙總督李鶴年照覆スル所ノ書慢リニ無稽  
 ノ異論ヲ起シ稍我ニ抗抵スルノ勢アリ又近口兵ヲ出シ琉球ノ罪ヲ問フ  
 ノ浮言アリ從道竊ニ其狀ヲ察スルニ彼唯我政府ノ運動ト英米公使ノ橫  
 議ト從道命ヲ矯メ兵ヲ行ルノ浮言トヲ側聽シ慢リニ虛言ヲ張リ之ヲ劫  
 スニ過ス福島九成現ニ臺灣府ニ至リ鎮臺知府知縣海防委員等ノ諸官員  
 ニ逢ヒ應接スル所彼等敢テ鶴年照覆ノ意ヲ維持シ我ニ論スルノ力ナク

又兵ヲ出シ我ヲ拒ムノ色ナシ蓋シ此事實ニ我

天皇ノ親諭ニ出テ其處分スル所苟ナラザルヲ知リ且ツ我兵氣ノ強盛ナル  
 ヲ憚リ九成ノ間言ニ迷ハサレ少シク和容安ヲ偷ムノ情アリト從道即チ  
 此際ニ乘シ急ニ諸ノ處分ヲ達スヘシ今其成算已ニ定レリ伏テ冀フ貴下  
 幸ニ前意ヲ固シ務テ廟議ヲ維持シ以テ此局ヲ了セシメヨ今更ニ谷干城  
 樺山資紀ヲ遣シ詳ニ此地ノ景況ヲ通シ又赤松則良福島九成ヲ北京へ出  
 シ柳原公使ノ意想ヲ添ヘシム從道ハ乃チ優ニ將士ヲ養ヒ暫ク山野ヲ墾  
 キ以テ其良報ヲ得ヘシ貴下幸ニ從道ノ意ヲ取容シ具ニ諸大臣各卿ノ熟  
 議ヲ經敢テ奏聞ヲ忝スルヲ得ンヲ從道誠ニ感戴ノ至ニ堪ス不宣

明治七年六月七日

蕃地事務長官大隈重信殿

蕃地事務都督西鄉從道



四四五 關義臣書翰「大隈重信宛」 明治七年六月七日

内啓非職之輩或ハ在職之輩ノ内又ハ地方長官之輩ノ内兔角當今云々不平ヲ鳴ス夫等より地方會議ヲ急キ御開ヲ上申建議セン杯ノ模様も有之過刻話次内々申上候右ハ小生等ニ於テ雷同スル譯ニ無之極テ消却方ノ見込ニ御坐候然ルニ閣下へ密言仕候様ナル儀發露仕候ハ不容易ノ始末ニ御坐候條乍勿論御胸底御秘藏聊御他言無之様爲公私懇願仕候恐縮ナカラ婆心之餘リ更ニ上言仕候謹言

七年六月七日

湘雲生

明公閣下

御一覽後火中を奉乞

四四六 大久保利通書翰「大隈重信宛」 明治七年六月九日

昨夜者參上御長坐御妨申上候扱今朝御出懸之時刻七時比与申上置候處少々御延刻被下度實之突然御出相成來人等にて不都合有之候ハ不相濟奈島津久光家也ら原召呼篤与申合置合ニ申遣候處同人出違居未相見得不申候付追付參次第同人談之上則何時御出可被下与可申上候間左様御待可被下候此旨早々申上候拜首

六月九日

利通

重信様

【参考】 大久保利通書翰「三條實美宛」 明治七年六月九日

昨夜大隈ハ參候ハ十分愚存も吐露仕猶談合之次第有之今日中ニハ何分相分可申与奉存候ニ付其上申上候様可仕候昨日黒田より御舍之趣拜承仕候ニ付一先大略申上置候乍恐以寸楮如此御坐候誠惶々々

六月九日



實美公閣下

猶々い曲は御直ならては難申上外ニも所存も有之候故先參殿も  
不仕候

【備考】利通前夜重信を訪ひ、大に所存を談ず、この書はこれを報するものなり、  
この事大久保日記に詳かなり、六月八日の條に曰く、今晚八字ヨリ大隈  
子の參、同人進退之事ニ付十分見込ヲ論シ、切迫ニ申入候、若同人退職ト  
動カサル決心ナレバ、小子モ見込有之故、決答承リ度云々申入候處、然ラ  
ハ久光公の出頭、明朝十分申上候上、何分御答可申上与ノ事ニ候十二  
字比引取候とあり、この會合により利通と重信の意志は大に疏通せる  
如く、重信は飽まで島津に面會して曲直を正さんとし、利通は大に重信  
を支持せんとせるもの、如し、六月九日附利通の書翰二通、五代の同十  
七日の書翰、並に同十日利通の三條宛の書翰は、總てこれ等の事情を語  
るものなり、また重信が三條、岩倉並に島津に寄せたる書翰は、何れもこ  
の會見以後に成りしものなるがごとし、

四四七 大久保利通書翰「大隈重信宛」 明治七年六月九日

唯今奈ら原參候付談置申候間何時ニも御都合次第御出懸可被下就而モ  
奈ら原に御逢御取次有之候方可然昨夜申上置候得共猶同人与談合初發ハ  
家扶ハ謁見御申入若や御斷申上候節は推而御申入相成候上否申上候節左  
様からハ家令に面會御申度与之手順ヲ以奈ら原に御引合被下候様以し  
度少々都合も有之候付右通願上候同人も御出之儀承別而之幸与申居候申  
上候迄も無御坐候得共寸毫無御遠慮十分ニ御論破被下度假令如何様之不  
都合ヲ生候而も少しも差支無御坐候奈ら原にハい曲申含置候付同人之處  
聊御氣遣之儀無之候付御心得ニ申上置候此旨早々拜首

六月九日

利通

重信様

【参考】

大久保利通書翰「三條實美宛」 明治七年六月十日



拜讀仕候大隈進退之義ニ付ハ於小生折角心配中ニ御坐候同人凡ハ辭職与相成候ハ決ハ相濟不申尤御免可相成義与も不奉存候就ハ此結局相付不申候ハ左府公之處も致方有御坐ましく歟ト奉存候此段拜復迄如此御坐候拜首

六月十日

利通

實美公閣下

四四八 大隈重信上申書

三條實美等宛 明治七年六月

曩ニ島津左大臣公ノ建議アルヤ本月七日閣下重信ニ諭スル所アリ重信乃チ鄙見ノ概略ヲ陳述シ尋テ病ヲ以テ辭職ヲ請ヘリ退テ之レヲ友人ニ聞ク其建議條款中重信カ職ニ在ル破廉恥ヲ以テ物議ヲ來タシ因テ重信カ進退ニ及ヘリト重信憂惶措ク能ハス竊ニ思フ聖恩優渥重信カ不肖ヲ棄テス久

シク三職ニ列セシム重信日夜奮勵維新ノ業ヲ贊成スル所アラシキニ是レ圖ル而シテ自ラ信ス重信心事之レヲ天地神明ニ質シテ愧ルナシト然ルニ重信果シテ罪過アラハ何ノ顔アリテ容隱シテ朝ニ立タン又安クソ内外人ニ對セン是レ聖明ノ累ヲ爲スナリ願クハ閣下成憲ニ因リ法吏ニ下タシ審斷スル所アラシメハ重信湯鑊ト雖トモ之レヲ甘ンス事若シ讒構ニ出テ無根ノ說ヲ主張シ以テ公ノ明ヲ惑ハシ重信ヲ罪過ニ誣ユルモノアランカ是レ亦法ノ敢テ宥スヘキニ非ス閣下重信ガ愚衷ヲ察シ速ニ明斷ヲナシ其事實ヲ詳ニシ是非曲直ヲ公裁セラレンヲ懇祈ノ至ニ勝エス誠恐謹白ス

明治七年六月

大隈重信

三條太政大臣殿

岩倉右大臣殿

閣下



附 左府殿建議中足下行跡ニ付掲載ノ廉ハ無之唯免職之義ヲ内談有之候迄ニ候事

四四九 大隈重信上申書 [三條實美等宛] 明治七年六月十三日

重信前日一書ヲ捧ケ衷情ヲ懇祈ス閣下諭示スルニ島津左大臣公之建議中重信カ行事ニ涉ルニ非ス公唯重信カ職ヲ免センヲ内談セリト重信命ヲ得テ驚疑ス疑テ質サスンハ大臣ニ接スル道ニ非ス請フ更ニ之ヲ言ハン夫閣下公ト同シク中興ノ元老職海内ノ具瞻ニ在リ其言行人心之向背之レニ係リ治亂ノ機之レニ乗ス重信不肖ト雖凡員ニ内閣ニ備ハル亦衆ノ屬望スル所タリ而シテ公苟焉トシテ重信カ免職ニ内談スル所以ノモノハ其職ニ稱ハサルヲ以テカ將タ過誤失錯之糾正スヘキアルカ閣下和シテ之ヲ然リトス抑高意ノ公ト符スルカ然ルニ免職ハ參議ニ止ル云々ト其過誤失錯果シテ該職ニアルカ是重信カ疑ノ解セサル所ナリ願クハ閣下襟懷ヲ披テ明示

シ以テ重信ヲシテ安スル所アラシメヨ然ラサレハ重信皇帝陛下ノ明ヲ汚シ且ツ閣下ノ知ニ負ク恐懼ノ至ニ勝エス謹白  
明治七年六月

大隈重信

三條太政大臣殿

岩倉右大臣殿

閣下

【參考】 三條實美書翰 [岩倉具視宛] 明治七年六月十三日

御紙面拜承候於下官も今朝御談申候外無之候過刻大隈來候に付今朝御談申候通申聞候得共委細之趣意相示不申は今朝之書面に於ては必ずす押而委細承度被申出に相違無之と存候久光談同人免職の趣意は大隈世上段々物議も有之御爲不宜と申位の事相覺候併於愚亭會合之節同人勤中姦曲之所業有之免職と公然御示し相成候ハ、臺灣事件に



紛れ無之との口上有之候様相覺申候併是は申出し候は不宜唯ばつ  
と致候處に申立之事を示し候外無之と存候久光卿へ申入候事は不  
可然と存候海江田(依義)は何も申居不申付先今朝之處に大隈に御示し相  
成可然存候草々拜答如此也

六月十三日

實美

岩公

明三字愚亭集會に付明朝寺島計出會(宗則)之事は相見合可申候

四五〇 關義臣書翰

「大隈重信宛」 明治七年六月十二日

卑官關 義臣

惶懼再拜謹テ書ヲ 參議兼大藏卿大隈明公閣下ノ執事ニ致ス身天下ノ大  
事ヲ擔ヒ始終其喜感ヲ共ニスル茲是レ閣下ノ所自任而テ識者ノ所同許亦

非誣也乃知ル閣下ノ進退藏否ハ即チ天下ノ盛衰安危關焉閣下宜ク百慮自  
重而テ老成事ヲ處スヘキ也且夫レ閣下ノ職ヲ奉スルヤ死後已ント是閣  
下ノ嘗テ言フ所ニシテ義臣曩ニ之ヲ朋友之言ニ聞テ而テ信ル處ナリ然而  
閣下近口辞表ヲ奉ル云々衆口紛紜民心洶々而テ識者ノ落膽冷魂スル所初  
ヤ義臣之ヲ不信而テ頃口其妄ナラザル知ル驚愕自失悲歎措ク所ヲ知ラズ  
斯レ邦家萬民ノ爲メ驚歎スルナリ敢テ閣下一身ノ榮枯浮沈ノ爲ニ非ズ况  
ヤ義臣曾テ閣下ノ愛顧ヲ受ケ以ノ爲メニ出ルニ非ズ義臣才劣識小而言訥  
天下經綸ノ事之ヲ縷述陳辯スル能ワズモ亦自ラ見ル所ナキヲ得ズ抑天下  
ノ盛衰安危ハ氣運時勢ノ然ラシムルト雖凡亦人ニ因テ然ルニ非サルヲ得  
ンヤ目今閣下ト他一二ノ重臣アル乃其人ナリ閣下ナクンハ恐ル一二ノ重  
臣亦其手ヲ施ス處ナク何以天下ヲ經營スル況テ維新以來内外多事困難ノ  
今日ヲヤ而テ閣下ノ明識忠力能ク之ヲ修理維持スルニ足ル是レ海内人民  
ノ依頼スル所 天皇陛下モ亦信テ而許ス所義臣何ソ喋々ヲ須ンヤ閣下ノ



任重キ如此矣君民ノ望ヲ屬スル深キ如此矣然爾閣下一朝頓ニ其位ヲ遁ン  
ト欲スル者何ソヤ嗚呼誤ル矣蓋シ閣下特別猶見ル所アリテ然ル乎而モ  
極テ知ル閣下ノ持論ニ非ス閣下ノ本心ニ出ルニ非ス假令閣下耐力不忍無  
止權略尙長病ノ時トシテ激劑ヲ投スル如キ一時ノ本心ニ出ルモ天人共ニ  
許サバル所政府豈速ニ其請ヲ聽サンヤ茲是レ義臣ノ自信テ疑ヲ容レザ  
ルナリ於是乎義臣自信自安少シク排憫消熱スルアラントス若其レ不然シ  
テ政府或ハ其請ヲ允シ閣下亦決然振袂而去乎則此邦家ヲ如何ン閣下ノ  
真意何レニ在ル哉義臣倉卒堂下ニ趨リ安否ヲ審ニシ旁恭ク之ヲ質問セン  
ト欲ス而ニ昨今少シク病ニ罹リ枕ニ伏ス故ニ先謹テ書ヲ執事ニ致スト云  
委悉近日ノ拜謁ヲ期ス至情無已言涉猥雜請善萬恕惶懼再拜白

明治七年六月十二日

四五 大隈重信書翰

西郷從道書翰

明治七年六月十三日

五月廿六日附ヲ以テ高砂丸へ御附托ノ御書面本月九日相達シ兼テ於崎陽  
御示談ノ通り容易不開兵端御見込ニ候處日進艦近海測量ノ節陸地ヨリ小  
銃被打掛且ツ斥候兵狙撃致サレ候ヨリ廿二日接戰勝利ノ次第並諸會長等  
追々歸降ノ始末マデ逐一御來示ノ趣致具承尤モ不堪安悅次第即正院へ致  
上申候此段及御回答候也

七年六月十三日

大隈事務長官

西郷事務都督殿

四五二

西郷從道書翰

大隈重信宛

明治七年六月十三日

本月十日猶龍丸到着去月二十五日御發書數通一同收掌致披見候庶謨益堅  
固柳公使到滬等大ニ安心イタシ候本月六日明光丸當灣解纜谷參軍歸朝ニ  
付同人ヨリ詳悉言上可仕爾後知勞棗會長倬箕篤龜仔角會長伊猪等初メ十



有餘長牛三頭鶏及卵等ノ土物ヲ携へ再ビ來テ歸順ヲ乞フソノ後加知來及  
 ヒ上下硲社並ニ獲仔高山々頭人等各來降ニ付本月十一日龜仔角ニ兵ヲ分  
 遣ノタメ赤松參軍一小隊ヲ率ヒ日進艦ヨリ同所へ相廻リ直ニ上陸野營布  
 設ニ及候條最早追々實効ヲ奏シ候へハ此上ハ柳公使北京應接ノ消息致渴  
 望候尤トモ日進艦都合次第不遠内赤松參軍北京迄被相越候筈ニ候將亦當  
 地ノ景況巨細可申進御申越ニ候へル御承知ノ通崎陽開帆ノ砌船舶ノ手違  
 材木其他必用ノ物品廻漕ニ不相成暑熱九十餘度ノ候如此ノ久ヲ經候迄全  
 軍一般幕中ノ住居ニテ進擊ノ差配各所ノ分遣土人ノ接待等雜務鞅掌不得  
 已大略及報告候此段不惡御聞置有之度明朝猶龍丸開帆ニ付信號士官四十  
 餘名病人十名爲致歸國候筈ニテ混雜ノ央今午前第八時高砂丸到著旁以此  
 段勿々及御報候也

明治七年六月十三日

蕃地事務都督西郷從道

蕃地事務局長官大隈重信殿

四五三 五代友厚書翰「大隈重信宛」 明治七年六月十七日

久光<sup>(天久侯)</sup>御面會之上直ニ御辯論被下候方今朝甲東<sup>(天久侯)</sup>細々御談合申上置候由  
 只今猶同人ヲ呼ニ參リ罷越候處右ニ一條ニ有是非此機會を不失御辯論相  
 成候ハ、無論晴天白日之時ヲ得可申と存今夕刻御出掛被下候様拙生<sup>(天久侯)</sup>奉  
 專念候今日之會議は外國人内國旅行一條ニ有<sup>(天久侯)</sup>三職以上集會ニ相成甲東子  
 も出席仕らせ久光ニも出席仕居候儀ニ付今夕御出掛相成候ハ、所勞を以  
 相斷候儀不出來若乍此上辞去之談有之候ハ、奈良原等<sup>(天久侯)</sup>御迫被下候様仕  
 度甲東<sup>(天久侯)</sup>も分<sup>(天久侯)</sup>御示談申上候様承候付不取敢書中を以奉促候勿々頓首

六月十七日

猶々夕刻ニは參上御模様拜承仕度相樂居申候

五代



御親展

四五四 吉田清成書翰「大隈重信宛」 明治七年六月十八日

歳計收出之期限改正之義、付検査寮出仕之無號再應差出候間御一閱被下  
度候右ハ此程より度々及御論談候義ニも有之殊ニ重大之事件故御一判無  
之候ハ尤も不都合有之實際難施行候間押御一判ヲ希義ニ御座候右ヲ  
御一決相成候上ハ續而上申且ツ布達文等も當時取調中ニも有之至急請裁  
致度候間可成丈早目ニ御決下有之度所希候右迄早々如此候也

六月十八日

(大藏少輔)  
清

成拜

大藏卿殿閣下

追伸内地旅行之義も大抵當省之見込ニ歸シ候乎と存候昨夕今朝も三條  
岩倉之兩大臣方へ逐一致建言候間左様御詳知被下度候尤各國公使へ宛

可差出書案も取調候様との御達故取調中ニ御座候

(租税事務助)  
星亨之義ニ付御下問之義有之到底當人之職務上進退ニ及ひ候様之義有

之候ハ甚不都合之極と存居候間是亦可然御答申上候積ニて松方(正義租税助)預る

と申談答書取調中ニ御座候極リ當人之進退伺ニ亦も差出候上ニて何と

御處分濟之姿ニ歸し可申と申上置候右ニハ公使等折合候乎之懸念

有之哉ニ候へ共穩當之所分とても限りあるもの故到底抗議ヲ主張致

し候見込ニ御座候

右今日横濱ハ御歸京之有無不奉存候付爲念申上置候大久保卿ニも今日

ハ出勤相成候

左府公ハ未出勤無之候事

寺島も同斷之

【備考】是年十月十三日、會計年度を改め、七月一日より六月三十日迄を一週年

と定む、内地旅行云々は外國人の内地旅行問題につき、外國公使より嚴